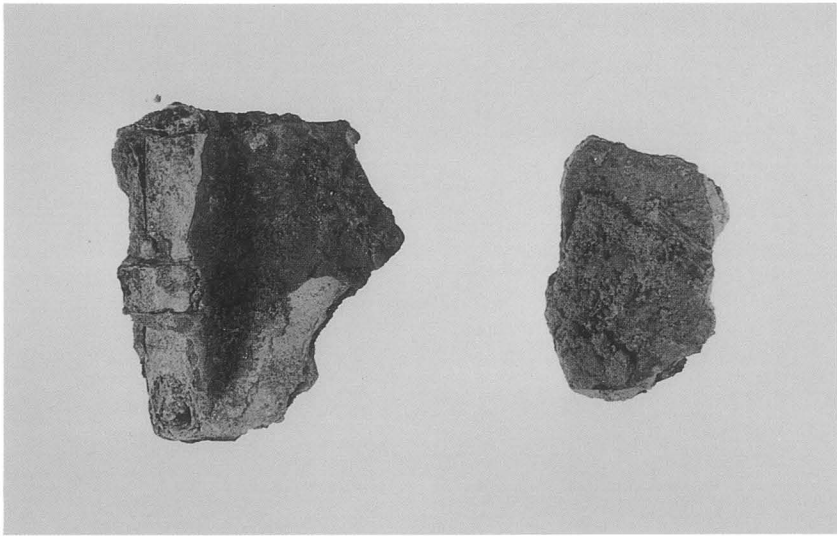


伊丹市緑ヶ丘遺跡

1986年3月

伊丹市教育委員会

伊丹市緑ヶ丘遺跡



1986年3月

伊丹市教育委員会

序 文

伊丹市緑ヶ丘の地は、長年の調査で明らかにされた国指定史跡の伊丹廃寺跡が所在することによく知られています。

このたびは陸上自衛隊良蓮寺宿舍の第2期改築工事に先立ち、伊丹廃寺跡に隣接すること、かつての緑ヶ丘古墳群の分布域であること、さらに縄文時代にまで遡る遺跡の存在する可能性もあること、また「鋳物師」集落に近接する地区でもあることなどを念頭において、埋蔵文化財の存否確認のための発掘調査を実施しました。

その結果、村川行弘教授を団長とする大阪経済法科大学調査団の方々のご努力により、予想以上の成果をあげるに至りました。

第1次確認調査で、縄文時代の石鏃・削器の散布を見た後、新たに検出した掘立柱穴群について、関係者各機関の緊急協議に基き、この柱穴群に関する遺構の規模を究明するための第2次調査をひき続き行ない、所期の成果をおさめました。

検出された奈良時代の建築遺構群の全面保存については、予定建物の設計変更が不可能という事情のもとに実現しませんでした。伊丹廃寺跡関連遺構の存在を記録にとどめることができました。また、今後の伊丹廃寺跡周辺開発に際しましてもより精密な調査と保存方策を考える上で多大の参考となる資料と存じます。

末尾になりましたが、調査実施にご協力いただいた大阪防衛施設局、陸上自衛隊千僧駐屯地業務隊および大阪経済法科大学の関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

昭和61年3月30日

伊丹市教育長 佐 坂 茂 男

凡 例

1. 本書は防衛庁施設局の千僧特別借受宿舍（5階建）建設にともなって実施した発掘調査である。
2. 発掘調査は伊丹市緑ヶ丘地区埋蔵文化財調査団の編成を大阪経済法科大学・村川行弘教授に依頼し、大阪防衛施設局長・伊丹市教育長・同調査団長村川行弘との三者契約を締結することにより実施した。
3. 本書の執筆は村川行弘、橋本 久、浅岡俊夫、村川義典が検討討議し、次のとおり分担執筆した。

I. はじめに	村川行弘
II. 調査の経過	橋本 久・村川行弘
III. 遺跡の立地と環境	浅岡俊夫・橋本 久
IV. 発掘調査の概要	村川義典・福永伸哉
V. まとめ	村川義典・浅岡俊夫

4. 本書に掲載した図の作成・製図は村川(義)があたり、一部浅岡が行なった。
5. 写真撮影は現場写真を村川(行)と浅岡が、遺物写真を浅岡がたった。
6. 本書の編集は伊丹市緑ヶ丘地区埋蔵文化財調査団が行なった。

本文目次

I. はじめに	1
II. 調査の経過	3
1) 調査にいたるまで	3
2) 調査の組織	3
3) 調査日誌抄	4
4) 整理作業	6
III. 遺跡の立地と環境	8
IV. 発掘調査の概要	10
1) 遺 構	10
2) 遺 物	12
V. まとめ	17

図・図版目次

第1図 緑ヶ丘遺跡と周辺の遺跡	7
第2図 石鏃と削器	12
第3図 金鍍金鉸具	13
第4図 遺跡の現況 (1980年)	20
第5図 寛文年間北村絵図 (『伊丹古絵図集成』より)	21
第6図 緑ヶ丘遺跡と伊丹廃寺	22
第7図 調査地区実測図	23
第8図 掘立柱建物跡SB 1・SX 1実測図	25

第9図	掘立柱建物跡 SB 2、鉸具出土状況実測図	26
第10図	石器・瓦実測図	27
第11図	瓦実測図	28
第12図	須恵器実測図	29
第13図	土師器実測図	30
第14図	土師器・磁器・瓦実測図	31
図版1	発掘前の現況、緑ヶ丘遺跡と伊丹廃寺	33
図版2	主要遺構全景、SB 1・SB 2 全景	34
図版3	調査地東部発掘状況、鉸具出土状況	35
図版4	SK 1 遺物出土状況、SK 1 発掘状況	36
図版5	鉸具	37
図版6	石鏃・削器	38

I. はじめに

昭和60年4月に伊丹市教育委員会より緑ヶ丘地区の埋蔵文化財確認調査を依頼された。本書はその調査成果の報告である。ここに大阪経済法科大学が調査を担当することになった契機を明らかにして、序文としたい。

伊丹市緑ヶ丘地域の埋蔵文化財調査は、35次に亘る伊丹廃寺関係の発掘調査を高井悌三郎辰馬考古資料館長が担当・指導され、その全調査に大阪経済法科大学の橋本久助教授が参画してきた。さらに伊丹市内のその他の地域の文化財調査についても、橋本助教授は調査団長として各調査を担当し、今日に至っている。親しい高井・橋本両氏の長年の調査地域であり、私も協力を惜しむものではなかった。

昭和25年に尼崎市の猪名寺廃寺址の発掘調査を担当した際にも、伊丹廃寺址の遺存状況や規模の状況を予察調査しており、田岡香逸氏が主担されていた初期の伊丹廃寺址発掘調査にも協力してきた。

40年ほど前になるが、緑ヶ丘地区に兵庫県警察学校が所在した当時には、たびたび警察学校を訪れ、同校に保管されていた緑ヶ丘古墳群出土の遺物や伊丹廃寺関係の遺物を実測したり、未だ遺存していた数基の円墳群を確認した思い出がある。当時の遺跡地周辺は畑地・藪地であったが、現在は都市化され景観を異にしている。

私の昭和21～25年頃の調査日誌をみると、伊丹廃寺の礎石の遺存状況や分布図を記し、早急な調査と実態の解明、さらに現状保存を伊丹市に陳情している。また緑ヶ丘古墳群についても、警察学校により破壊されている現状、破壊で採集された勾玉や土器類の保管状況などを報知して早急な保存対策と調査を要望し、あわせて伊丹城跡の調査と保存を伊丹史談会、尼崎史談会の方々と一緒に当時の市長にお願いしている。そのために伊丹市域の歴史、文化財についての解説原稿も教育長に提出しており、その項目控も日誌に留めている。ことに故人の岡田利兵衛・伴正之・山本賢之助氏らの案内で市域の出土遺物を調査し、御願塚古墳の出土遺物などを世に紹介したこともある。

以上のように、この地域は私にとって個人的にも古い関わりあいをもっている。

今回の調査予定地は、国史跡伊丹廃寺址より東へ50mの距離にあり、伊丹廃寺関連遺構の想定される地域である。さらに緑ヶ丘古墳群が北方に存在した地域であり、寛文年間北村絵図でも古墳群や寺院址が記載されている。最近では近辺で縄文時代の遺物も検出されている。このような立地から、埋蔵文化財調査では周知の遺跡にあたる要注意の地域である。

兵庫県警察学校の敷地跡は陸上自衛隊中部方面総監部となり、埋蔵文化財については未

調査のままに、種々の建造物が造営されてきた。今回の調査地北側にも鉄筋5階建宿舍がすでに建っている。自衛隊の説明では、すべて法律上の手続きを踏んでおり、この宿舍第1棟の建設に際しても、伊丹市教育委員会より問題なしとの回答を得た上で建築工事をしている由である。今回の第2棟建設についても、数年前から計画があったが、前回の第1棟の建設の段階では問題なしとの回答を得ていたので、確認調査の予算は計上していない由であった。文化財行政の上では要注意である周知の遺跡地域について、どうしてこのような対応がなされて来たのであろうか。

ところが、防衛庁が今回の着工予定を市教育委員会にあらためて照会したところ、事前の確認調査が必要との回答があり、急拠、建物予定地の埋蔵文化財確認調査のための経費を捻出したとの由である。しかも宿舍建築工事は旧木造宿舍12戸を撤去して30戸1棟の鉄筋宿舍を年度内に建設するため、逆算して7月22日までに調査の完了が必要である。したがって6月下旬から調査を始めなければならない。

このような事情を背景にして、伊丹市教育長から大阪経済法科大学に確認調査の担当依頼がなされたのである。

大学としては、6月中は授業があり、7月も10日までは小試験がある。7月中旬にならぬと調査には入れない。それでは困る…。というわけで、関係者の間で協議を重ねた。大学は伊丹市の調査依頼に協力するという基本的立場に変わりはないが、物理的に次善の方法を考えざるを得なかった。

最終的には、大学当局の了解を得て、6月21日の旧宿舍撤去完了に引続き、翌6月22日より調査を開始し、着工時限の7月22日までに調査を終了する。このため6月中および7月10日までは、考古学研究会の学生諸君にローテーションを組ませ、以後も全員が日割りに従って補助員として調査に参加することとした。このように大学当局の理解と協力によって、本学調査団による当遺跡の発掘調査が実現する運びとなった。

調査にあたっては、伊丹市教育委員会、防衛施設局、陸上自衛隊千僧駐屯地および伊丹駐屯地両業務隊、兵庫県立伊丹高等学校の各位から全面的な協力を受けた。厚く感謝の意を表するものである。

1986年3月

伊丹市緑ヶ丘地区埋蔵文化財調査団

団 長 村 川 行 弘

Ⅱ．調査の経過

1．調査にいたるまで

1985年4月23日、伊丹市教育委員会から大阪経済法科大学教授村川行弘、同助教授橋本久に対し、伊丹市緑ヶ丘7丁目にある自衛隊良蓮寺宿舍の第2期改築工事に伴い、東西56.7m、南北7.3mの建物予定地についての遺構確認調査を依頼したいとの申入れがあった。この地は陸上自衛隊伊丹駐屯地の東に隣接し、国指定史跡伊丹廃寺跡の周縁部にあたり、また緑ヶ丘古墳群の分布域にも含まれ、さらに縄文時代の遺物も付近で採取されている地である。村川と橋本は大学としての調査方法、調査参加者、調査時期、その他について検討する旨を回答した。

5月18日、25日の両日、市教育委員会との連絡調整を重ねたのち、6月1日に大阪防衛施設局、千僧駐屯地の担当官を交えて協議した結果、調査を引受けることとなった。ひきつづいて、大阪経済法科大学考古学研究会を中心に準備作業を始めた。

2．調査の組織

調査団の編成は以下の通りである。

団長 村川行弘（大阪経済法科大学教授・同総合科学研究所長）

調査主任 橋本 久（大阪経済法科大学助教授）

調査員 村川義典（大阪府立豊島高校教諭）

福永伸哉（大阪大学大学院生・考古学専攻）

調査委員 浅岡俊夫（伊丹市教育委員会社会教育課）

調査補助員 大阪経済法科大学考古学研究会

竹田久治 太田垣好孝 樽井 正 田中賢人 松井宏明 伊藤 潔
森岡英定 飯島秀樹 石川直充 浅山まり子 森川壮一 横山聖二、
西脇対名夫 鈴木克彦（京都大学）、八瀬正雄（龍谷大学）、
山本大治（神戸大学）、

調査協力者 陸上自衛隊千僧駐屯地業務隊

足達至正 吉田正和 奥谷正行 木村宗彦 横川正義 沖田美明
古沢重司 倉郷 貢 山本金樹 古島重朝 森井一成 横林茂樹
井上昭二 福原昌弘 浜 栄治 高橋 昇 上田哲夫 岩永信幸
北村理恵 中西清二 宮崎万吉 若居伸治 平池昭彦 小野寺年幸
金岡明矩 中道清親 田中和輝 南 匡、

兵庫県立伊丹高校社会科研究部

竹松定雄 森本 徹 馬場康文 西久保弘史 岸原真木子 白井麻紀
高木有子 芝 光洋、

二渡 清（下坂部幼稚園事務長）、宮本 博（兵庫県立図書館）

大阪経済法科大学、防衛庁大阪施設局、（株）染の川組

事務局 伊丹市教育委員会社会教育課

3. 調査日誌抄

6月22日（土）雨のち晴。発掘調査第1日。建築予定地に東西60m・南北3mの主トレンチ（北）および排水溝を兼ねた東西60m・南北1mの副トレンチ（南）を設定した。3m区画で地区設定をおこなう。千僧駐屯地業務隊管理科長平池昭彦氏・同1等陸曹古沢重司氏が現場視察、以後ほぼ毎日来訪、来援。

6月23日（日）雨。作業を中止。橋本が引率し、伊丹廃寺をはじめとする周辺遺跡を巡検。つづいて市立博物館で伊丹廃寺の出土品などを調査。

6月24日（月）曇。重機で掘さくを開始。表土（盛り土）の下に灰色粘質土の包含層があり、黄褐色粘質土の地山となる。地山の直上にも若干の須恵器・土師器片を認めるが、包含層中に近世磁器もみられる。地山はトレンチの中央部がやや高く、東西両端へかけて緩く下がっている。今日から千僧駐屯地業務隊から派遣されたメンバーが作業に参加。田中和輝氏が隊と調査団との連絡調整担当として常駐となる。

6月25日（火）豪雨。警報発令。作業中止。トレンチ内は満水。

6月26日（水）晴。排水作業。ついで発掘作業。中央部で南北方向の溝を検出。

6月28日（金）曇時々雨。排水作業ついで精査を続行。東部で石鏃を検出。

6月29日（土）雨。遺物整理および図面整理。

6月30日（日）台風接近で曇時々雨、作業休止。

7月1日（月）晴。トレンチ内の全域を清掃。東部より実測を開始。主トレンチの東区では奈良時代の瓦・須恵器・土師器を包含する土拵、その西端で縄文中期末のサヌカイト石鏃、ピット、南北方向の溝など。西区では柱穴群、南北方向の溝、須恵器の入った土拵などを検出。

7月2日（火）曇のち雨。トレンチ主要部をテント3張で覆い、雨中の作業を可能とする。ピットの検出をつづける。

7月3日（水）雨。排水作業、ついでピットの検出を続行。

7月4日（木）曇時々晴。地上直上で縄文時代のサヌカイト製削器。柱穴群は2間×2間以上の建物跡となりそう。

7月5日（金）晴のち曇。ピットの精査。撮影に備え、清掃。

7月6日(土)雨。排水作業。遺物の洗浄、整理。伊丹市教育委員会の大沢社会教育課長らと今後の調査拡大の必要について協議。

7月7日(日)曇。遺構の検出と清掃を続行。土坑SK2より奈良時代の布目瓦。

7月8日(月)晴。清掃完了。遺構撮影。20分の1実測図作成を開始。市教委、自衛隊と協議し、調査区の拡大と調査費の追加を決める。市教委に中間報告書を提出。

7月9日(火)曇のち雨。20分の1実測図の作成中に豪雨。千僧駐屯地業務隊長足達至正一等陸佐が現場視察。

7月10日(水)曇のち雨。柱穴群を検出している西半部を南へ8m拡大、重機で表土(盛り土)を除去し、ダンプカーで搬出。薄い包含層の直上でとどめ、手掘りにきりかえる。さらに柱穴列の全貌検出のため構内南辺まで排水溝を兼ねたトレンチを設定。遺構の拡がりを確認。土肥二等陸佐が現場視察。

7月11日(木)晴。西半部を北へ8m拡張し、重機で表土層の盛り土を除去。大阪経済法科大学法学部長福本憲男教授、兵庫県教委埋蔵文化財調査指導係長大村敬通氏が現場視察。

7月12日(金)豪雨のち曇。排水作業と地区杭の設置。遺物の洗浄と整理。今日から県立伊丹高校竹松定雄教諭の指導で生徒有志が放課後、調査に来援。

7月13日(土)曇。今日から染の川組の作業員10人がはいる。排水作業。南拡大区を地山まで掘り下げる。土層断面図の作成を続行。

7月14日(日)晴。南拡大区の荒掘り完了。北拡大区を地山まで掘り下げる。ピットSP61で金鍍金鉸具を検出。同じピット内に縄目叩き瓦、須恵器・土師器片も検出。

7月15日(月)晴。北拡大区の掘下げ続行。自衛隊幹部数名が現場視察。

7月16日(火)晴。村川団長が市教委で大沢課長に鉸具を預け、保存方を依頼。全域のピットの半割掘下げを完了。ピット内の土層図作成を開始。

7月17日(水)晴。神戸新聞に調査成果の記事が掲載される。この記事について市教委へ来庁し説明せよとの要請が団長あてになされた。今日まで社会教育部長以上の市関係者の現場来訪は一切なく、多忙な現場を無視した一方的要請のみ。現地説明会の予定を市教委に通知。各紙が取材。全域の清掃を完了。撮影。現地説明会資料の原稿を作成。夜、NHKが金鍍金鉸具の出土を報道。

7月18日(木)晴。20分の1実測図作成を開始。主要な遺物は村川調査員が実測。大形土坑SK1から土師器、須恵器、瓦など多量に出土。

7月19日(金)晴。溝の清掃を続行。20分の1図の作成も。SK1は約1mの深さですり鉢状。

7月20日(土)晴。遺構実測を続ける。午後、公開現地説明会。

7月21日(日)晴のち曇。実測を続ける。全域を清掃、ついで撮影。

7月22日(月)晴。発掘作業完了。午後、関係者現地説明会のあと、千僧駐屯地で調査

成果報告会。遺構の保存・破壊については関係官庁の検討に委ねる。

7月23日（火）晴。資材、遺物搬出。

7月24日（水）晴。砂4トンで遺構を仮被覆。破壊と決まれば補足調査を予定。

7月30日（火）晴。橋本・浅岡が鉸具を奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターに持参し、保存処理を依頼する。

8月6日（火）晴時々曇。遺構の破壊・記録の決定にしたがい、補足調査を実施。ピット群の断ちわり、ついで断面実測を開始。

8月7日（水）曇のち晴。建物跡SB1につづけ北へ1間分拡張、柱穴は認められず、建物の規模は確定。

8月8日（木）曇のち晴。実測完了。埋め戻し。資材撤収。

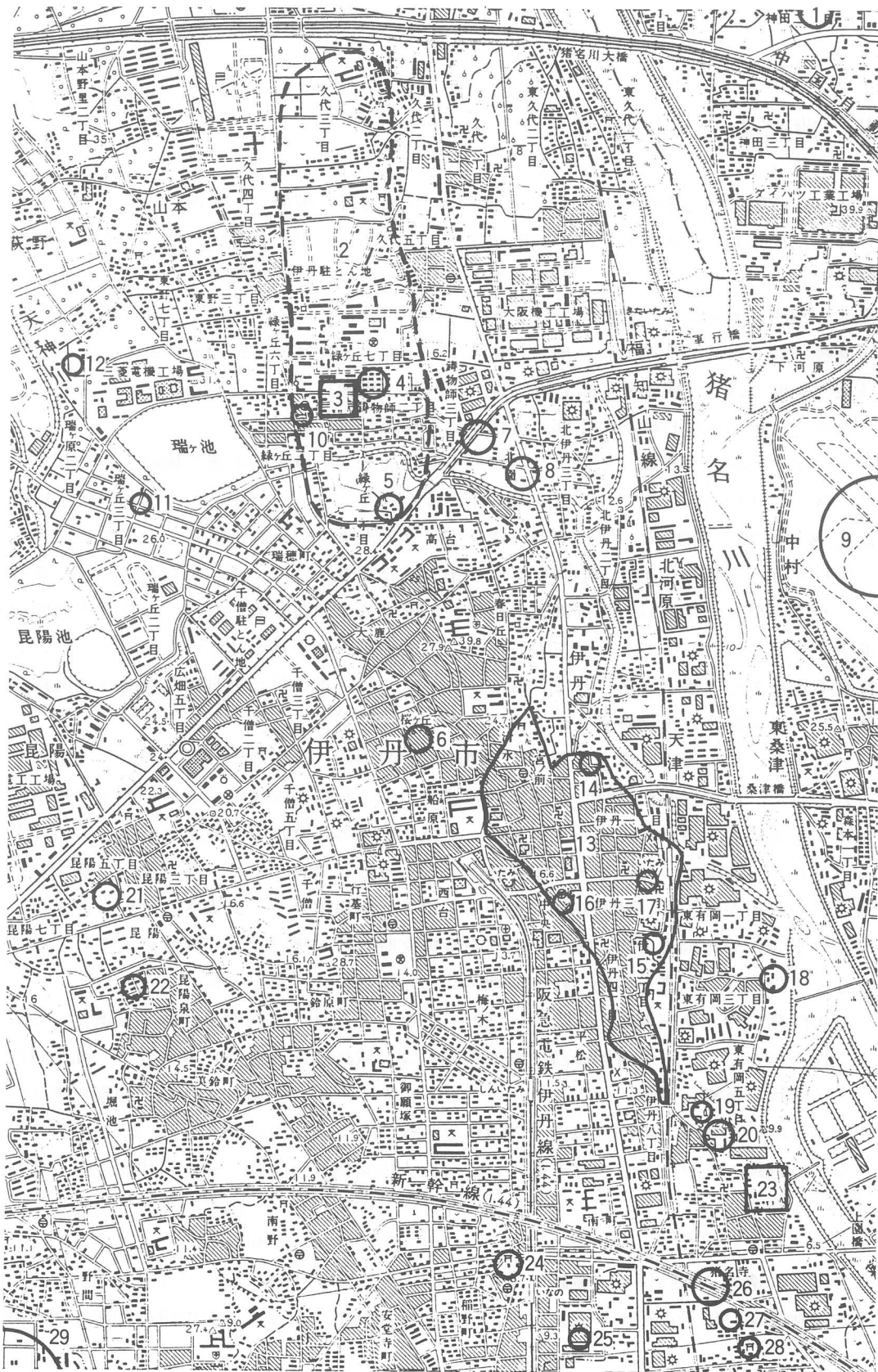
4. 整理作業

遺物の整理作業は発掘作業のあいだに、合宿中の学生たちが夜間あるいは雨天を利用して洗浄、個々の遺物への出土地点の記入（マーキング）をおこない、発掘作業終了後ひきつづいて村川調査員を中心に実測・拓本・撮影作業をおこなった。図についても、村川調査員を中心に整理作業をおこなった。

報告書の作成には、村川団長を中心に調査委員・調査主任・調査員が作業分担し、原稿、写真、図面の編集をおこなった。

主要遺跡名一覧（第1図参照）

- | | | | |
|-------------------|---------------------|---------------------|-------------|
| 1. 神田遺跡 | 2. 緑ヶ丘群集墳跡 | 3. 伊丹廃寺 | 4. 緑ヶ丘遺跡 |
| 5. 市民プール南側段丘端遺跡 | 6. 桜ヶ丘遺跡 | 7. 北村遺跡 | 8. 北園遺跡 |
| 9. 大阪空港A・B遺跡 | 10. 猿ヶ山城跡 | 11. 城ノ中城跡 | 12. 城ヶ市城跡 |
| 13. 有岡城跡 | 14. 有岡城内縄文遺跡（17次地点） | 15. 有岡城内縄文遺跡（11次地点） | |
| 16. 女郎塚古墳跡（女郎塚砦跡） | 17. 有岡城内古墳遺跡（1次地点） | 18. 松原遺跡 | |
| 19. 黄金塚古墳 | 20. 東り構内遺跡 | 21. 昆陽城跡 | 22. 昆陽堤ヶ内遺跡 |
| 23. 猪名寺廃寺 | 24. 御願塚古墳 | 25. 温塚古墳跡 | 26. 中ノ田遺跡 |
| 27. 園田大塚山古墳 | 28. 南清水古墳 | 29. 武庫庄遺跡 | |



第1図 緑ヶ丘遺跡と周辺の遺跡

Ⅲ．遺跡の立地と環境

緑ヶ丘遺跡は伊丹市緑ヶ丘7丁目66の伊丹段丘東縁部の閑静な住宅地の一角に所在する。伊丹段丘は猪名川と武庫川の間長尾丘陵から大阪湾にむかって舌状に伸びる洪積台地で、標高60mから5mのなだらかな台地を形成している。段丘はその発達具合によって北から南へ山本面・安倉面・中野面に分けられ、台地の東縁部にはより発達した加茂面が広がる。当遺跡は標高30mの加茂面に立地し、猪名川の水面との比高差は約15mである。なお、当該地の南側には『昆陽池陥没帯』と呼ばれる断層が東西にはしっている(1)。

遺跡の立地面は伊丹礫層の上部に堆積する黄褐色粘質砂礫層である。

次に歴史的環境を概観してみよう。伊丹市域は従来から遺跡の希薄な地域といわれていた。特に、伊丹段丘は対岸の千里丘陵に比べると皆無に近く、弥生時代の加茂遺跡(川西市)、安倉古墳(宝塚市)、伊丹廃寺(伊丹市)などがよく知られた遺跡であった。

伊丹廃寺は、昭和30年代に甲陽史学会の精力的な調査によってその全容が明らかになった。水煙の発見に始まった発掘調査の結果、法隆寺式の伽藍配置をもった奈良時代前期の遺構が確認された。中でも正面左右に二基の階段をもつ金堂基壇はほかに類例がなく、寺院建築上重要な遺構と考えられている(2)。そして、1966年3月に史跡指定を受け、史跡公園として主要伽藍が復元整備されている。

ところで一部の考古学者の間では、伊丹廃寺の周辺には古墳が点在していたことが知られていた。村川行弘氏の話によれば、戦後まもなく現自衛隊構内において数基の古墳を確認し、周辺古墳から出土した須恵器・金環・勾玉等の遺物を実見したということである。これらの古墳は、1970年頃の甲陽史学会による分布調査(3)では一基も現存しないが、須恵器の散布が見られ、『伊丹市史』第一巻に緑ヶ丘群集墳として公表されている。また、甲陽史学会の分布調査の際、緑ヶ丘地区から縄文時代の石鏃や土器が採集されている。こうして伊丹廃寺の調査を契機に緑ヶ丘地区はにわかに脚光を浴びるようになった。

近年開発に伴う発掘調査も日増しに増加の一途をたどり、市内の遺跡数は急増しつつある。1975年から始まった有岡城跡の発掘調査では、城跡関係の遺構に留まらず、縄文時代～古墳時代の遺構・遺物が検出されている。主なものとしては第11次・17次調査の縄文時代中・後期の土壇(4)、第20次調査の古墳跡(5)の検出など多大な成果を得ている。さらに、工事中に遺跡が発見されることもあり、伊丹廃寺の東側段丘下にて弥生時代の遺跡(北村遺跡)が発見されている。このように緑ヶ丘地区は原始古代から開けた地域であるにもかかわらず、未だ埋蔵文化財調査は思うように進んでいないのが現状である。

こうした遺構・遺物以外に遺跡の存在を知る手掛かりを得ることがある。数年前、伊丹市立博物館編『伊丹古絵図集成』の写真撮影を行っていた際、この地域の絵図に伊丹廃

寺をはじめ古墳や城跡などが描かれており、仰天したことがあった(6)。『寛文年間北村絵図』には伊丹廃寺の伽藍が描かれ、その西側に現在の瑞が池に接して「古城」(猿が山城跡)の記載があり、北側には「良連寺寺家屋敷跡」と記された構居が描かれてある。さらにその周辺には古墳と思われる丸印が数多く記されている。『寛文十年新田中野村・大鹿村提相論裁許絵図』は瑞が池が中心に描かれた絵図で、池の東西に城跡の構えが記されてある。東側のは前述した猿が山城跡で、西側のは旧字名から「城の中城跡」と命名した。

猿が山城跡は以前小高い丘があったといい、現在も住宅地の一部にその高まりが認められる。そして、下水道工事に伴う発掘調査の結果、堀跡の一部を検出した(7)。城の中城跡は区画整理事業によりその姿を留めていないが、以前は小高い丘があり、地元では城跡と伝えられていたという。区画整理事業の際、市教育委員会の関係者が立ち会ったようであるが、専門職員ではなく内容は不明である。良連寺寺家屋敷跡はその構えの形態からみて、中世の城跡か構居跡と思われるが、自衛隊敷地内に入っており今後の調査が待たれる。さらに今回の調査地点はこの絵図にある「北村池」の西に接する位置と推定される(第5図)。このように伊丹台地上には沢山の埋蔵文化財が眠っている。緑ヶ丘遺跡もその一つである。

最近、寺跡に付属する工房跡等の遺構が各地で発見され、従来の寺に限定した調査研究から一歩踏み込んだ調査研究がされるようになった。緑ヶ丘遺跡は伊丹廃寺に隣接した同時代の遺跡であり、同廃寺に付随した遺跡と考えられる。そういう意味から、緑ヶ丘遺跡は発見されるべくして発見されたといえよう。

最後に、この遺跡が伊丹廃寺に関連した遺跡として重要な意味をもつということだけではなく、遺跡のランク付けや調査方法・調査範囲を限定する動きにたいして、遺跡のとらえ方すなわち遺跡とは何かを考える契機になったことを付記しておく。

[註]

1. 藤田和夫・前田保夫「伊丹の地質構成」『伊丹市史』第1巻 1971.3
2. 高井悌三郎他『摂津伊丹廃寺跡』伊丹市教育委員会 1966.3
3. 兵庫県教育委員会『兵庫県埋蔵文化財特別地域遺跡分布地図及び地名表』 1970.3
4. 浅岡俊夫「有岡城跡(第11次調査)」『兵庫県埋蔵文化財調査年報』昭和58年度 1986.3
5. 1985年11月、有岡城跡女郎塚砦跡推定地から古墳時代前期の古墳跡を発掘した。
6. 八木哲浩編『伊丹古絵図集成』伊丹資料叢書6、伊丹市立博物館 1982.11
第5図参照
7. 浅岡俊夫「猿ヶ山城跡・伊丹廃寺跡(第34次調査)」『兵庫県埋蔵文化財調査年報』昭和58年度 1986.3

Ⅳ．発掘調査の概要

調査地区内は、3 m ごと小地区を設定し、北から南へA、B、C…とし、西から東へ1、2、3…とし、北西隅の杭に付した名称を小地区名とした。なお、伊丹廃寺基準線との関係では、伊丹廃寺内東基準杭から東に99.6m、北へ106.4mの地点に杭E 1、また東に161.2m、北へ109.1mの地点に杭E 21が位置する（第7図）。

1. 遺 構

基本的な土層の堆積状況は、①表土 ②茶褐色粘質土（遺物包含層）③黄褐色粘質土（地山）の三層からなり、調査地全域ほぼ同一である。地表面から地山面までは30～50cmと浅く、検出された遺構の大半は上部を削平されていた。おもな遺構は、掘立柱建物跡2棟（SB 1・SB 2）、柱穴遺構（SX 1）、溝7本（SD 1～7）、土壇および柱穴である。

SB 1（第8図）

拡大地区北部西半のA 5・B 5・B 6・C 4・C 5・C 6区にかけて柱間東西2間（3.6 m）×南北3間（5.5m）の掘立柱建物跡を検出した。中央列の柱穴は一つのみである。柱穴はすべて円形で径25～35cm、深さ15～20cmを測る。柱間の間隔は、東西が2.5 m、南北が1.2 mである。北西端の柱穴（SP 72）から、奈良時代前期の斜格子叩き目の平瓦1点（第11図14）と土師質土器片数点が出土した。他の柱穴からも土師質土器片が出土している。柱穴内の埋土は、他の遺構と同じ茶褐色粘質土である。

SB 2（第9図）

拡大地区中央部のD 5・D 6・D 7・D 8・E 5・E 6・E 7・E 8・F 5・F 6・F 7・F 8区にかけて柱間東西4間（8.2m）×南北4間（8.6m）の掘立柱建物跡を検出した。柱穴の掘方は一辺40～70cmの方形を呈し、柱当りは径10～20cmである。各柱穴内からは、土師質土器および須恵器が出土したが、いずれも細片であった。北西端の柱穴（SP 52）は、SB 1と共有しているように見えるが、SB 1とは建物の方向が異り、また時期の下るSD 6により削平されているため本来どちらかの建物を廃棄した後、柱穴がたまたま重なった状況で新しく建築されたものと思え、SB 1とSB 2が同時に隣接して建っていた可能性は低いであろう。

SX 1（第8図）

拡大地区南部西半のG 4・G 5・H 4・H 3区にかけて柱間1.5mで南北3間（6.6m）に並ぶ柱穴遺構四本を検出した。東西方向へは、南端のSP 36を角として西へ1.6 mに対応する柱穴（SP 64）があるが、他に対応する柱穴を見出せず、建物の復原は困難である。

柱穴はすべて径10～20cmの円形を呈し、掘方は一辺40～70cmの方形である。単なる柵列か、あるいは西側へ1間空けて連なる掘立柱建物のいずれかを想定したい。

SK 1 (第9図)

東西2m・南北1.5mの楕円形を呈し、深さ1.2mを測る大形土壇である。SB 2の北東のD 7・D 8区内にあり、SB 2の付属施設とも考えられる。遺物の最も多く出土した遺構で、実測可能な遺物の8割以上を占める。奈良時代前期の遺物が中心で、軒丸瓦・丸瓦・平瓦・土師質土器・須恵器などが投棄された状況で検出された。廃棄用の大形土壇である。

SK 2 (第7図)

拡大地区南部東端のG 9・G10・H 9・H10区にかけて位置する大形土壇である。東西2m、南北2.3mの楕円形を呈し、深さ80cmを測る。土師質土器細片が、数点出土したのみで、性格は不明である。

SP 61 (第9図)

F 3区の径0.3mのピットである。ピット内からは、奈良時代前期の縄目叩き平瓦片(第11図15)とともに、金鍍金鉸具(第3図7)を検出した。ピットの周囲からは、土師質土器・須恵器の細片が多く散布していた。

SD 1 (第7図)

B 4区からF 3区にかけて南西方向へ走る幅約0.6m、深さ約0.5mの溝である。溝内は他の遺構と同様に茶褐色粘質土で埋まっており、土師質土器・須恵器の細片がわずかに出土した。

SD 2 (第7図)

SD 1に平行して東へ3.5m隔り、A 6区からL 3区にかけて南西方向へ走る幅0.6～0.8m、深さ0.5mの溝である。SB 1と重なり、削平されていることから時期は下るものと思われる。土師質土器細片が出土した。

SD 3 (第7図)

SD 1・SD 2と平行してB 8区よりI 7区にかけて南西方向へ走る幅0.7m、深さ0.5mの溝である。SK 1およびSB 2の柱穴を削平しており、両遺構より時期は下る。土師質土器・須恵器細片を検出した。

SD 4 (第7図)

SD 3に平行して東へ17m隔り、D13・F13区を南西方向へ走る幅約1m、深さ0.5mの溝である。遺物は、土師質土器・須恵器細片があるが、少量である。

SD 5 (第7図)

SD 4に平行して東へ3m隔り、D14区からF13区にかけて南西方向に走る幅0.3m、深さ0.3mの溝である。SD 1～4に比べて幅が小さいが、SD 7も含めて全て同じ方向

へ平行して流れており、同時に造られたものと思われる。

SD 6 (第7図)

SD 2 と SD 3 を結ぶ拡大地区 C 5 ～ D 9 区に位置する幅 0.2 m、深さ 0.3 m の溝である。SB 2 の柱穴を破壊して造られており、時期は下る。他の溝と同時期のものであろう。

SD 7 (第7図)

D 15 区に SD 1 ～ 5 と平行して南西方向へ流れる幅 0.2 m、深さ 0.1 m の小溝である。南側へは続いているが、浅い小溝のため、削平されてしまったものと思われる。

その他のピット群 (第7図)

拡大地区東部に10数個のピットがまとまった状況で検出された。径 0.2 ～ 1 m と大小様々で、方向も一定せず、建物を特定できない。いずれも上部を削平されており、遺物は、土師質土器・須恵器の細片が出土した。

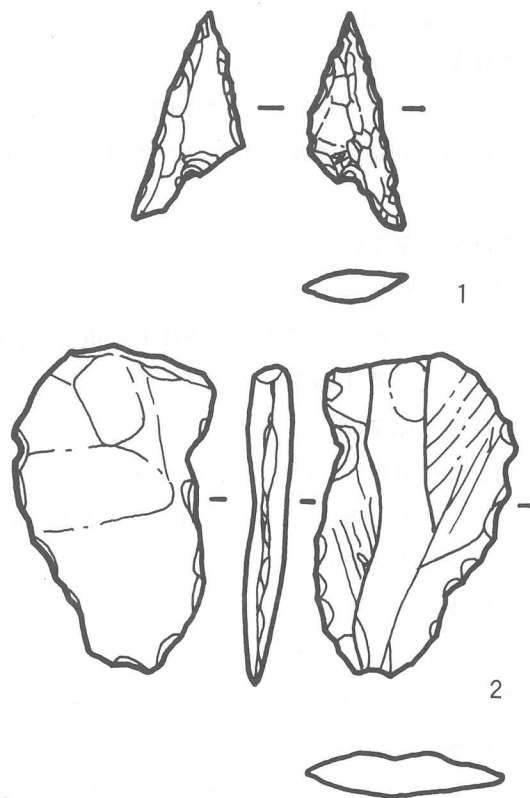
2. 遺物

おもな出土遺物は、縄文時代の石鏃・削器・チャート片や奈良時代の砥石などの石器類、奈良時代の須恵器・土師質土器・丸瓦・平瓦および金鍍金の銅製鉸具、近世のくらわんか茶碗・染付碗などである。縄文時代の石器は、伊丹段丘上で数カ所出土しているが、いずれも単独出土であり、今回の遺物も含めて検討が必要であろう。また奈良時代の遺物は、調査地西側に隣接する伊丹廃寺と密接な関係を有すると思われる。

石器(第2図1・2, 第10図3・4・5・6)

石器は、石鏃・削器・チャート片が各1点、砥石3点の計6点が出土した。

1はサヌカイト製の無茎石鏃である。基部の片方は欠損しているが、極凹形を呈する有脚石鏃である。全体に風化しているが、両面調整を施している。薄形の両面細部調整で整形され、中央の断面は両凸レンズ形である。長さ2.8



第2図 石鏃と削器 (1×1)

cm、幅1.7cm、厚さ0.4cmで原面は残していない。大阪市森の宮遺跡⁽¹⁾ V層出土の石鏃と類似しており、縄文中～後期に相当するものと考えられる。

2は、サヌカイト製の縦形剥片を利用した削器である。あまり風化を受けておらず、刃部は黒光りしている。端縁の大部分は両面細部調整で整形され、中央部に縦長の主剥離面が残る。長さ4.4cm・幅2.6cm・厚さ0.6cm。

3は、緑色のチャート片である。原面は多く残っており、部分的に剥離した痕跡が認められる。

以上の3点は、すべてAトレンチ東側の黄褐色粘質土層（地山）直上から単独で出土している。

4・5は、白色の仕上げ用砥石である。SK1から2点とも出土した。破損が激しいため形状は不明である。研磨面は2面あり、全体によく使い込まれ、中央は凹んでいる。

6は、緑がかった砂岩製の砥石である。一部欠けているが、全面が研磨面である。長さ14.8cm、幅7.6cm、厚さ6.7cm。SK1から出土した。

金 具（第3図7）

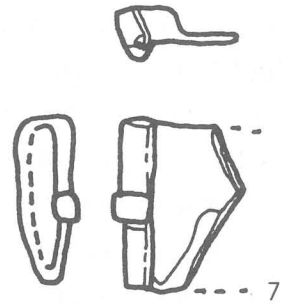
金鍍金の銅製鉸具1点がSP61より出土している。留金の部分は、長さ2.2cm、厚さ約0.8cmと小さい。残存幅は1.6cmで、錆化のため剥落は激しいが、元来表面全体に金鍍金を施しているようである。伊丹廃寺の発掘調査⁽²⁾では、鍍金製品として塔跡基壇前面で出土した鍍金鋼板片・鍍金薄手金具片・金堂基壇北辺西側から出土した小形金銅飾金具などの例がある。

瓦（第10・11図8～24）

軒丸瓦・丸瓦・平瓦などが出土している。完形品は1点もなく、すべて破片である。このため平瓦と熨斗瓦の判別は難しいのが大半である。ここでは一括して平瓦として扱う。

8は、軒丸瓦の子房（ $1 \cdot 4 \cdot 12 = 17$ ）である。周囲を欠くが内面はヘラ削りを施している。瓦質は軟質で長石粒を含み、表面の色調は黒色を呈する。土壇SK1から他の須恵器片・土師器片などとともに投棄された状況で出土⁽³⁾した。このタイプは、伊丹廃寺の軒丸瓦Ⅱ（波状文縁複弁花文軒丸瓦）に相当し、おそらく子房の周囲には8葉の複弁子花卉、その外に珠文帯を巡らし、波状文・素縁となるものであろう。

9～12は、丸瓦でいずれもSK1から出土した破片である。9の色調は灰色で、径8mmの釘穴がある。凸面はヘラナデを施し、凹面は端部を縦方向のヘラケズリで調整し、中央部は布目痕がある。10は厚手の丸瓦で、焼成は堅緻な須恵質であり、胎土に長石粒を多く含む。凸面には横方向のヘラナデ痕がみられる。凹面は全体に布目痕があり、端面の片方には、面取りを施している。11は、黒光りし、凸面は縦方向のナデ、凹面は全体に布目痕



第3図 金鍍金鉸具
(1×1)

がみられ、7条の縦帯界線が深く通う。端部に面取りを施す。12の焼成は軟質でもろく、淡黄色を呈する。凸面はナデを施し、凹面は全体に布目痕がある。9は行基葺瓦、10は玉縁付瓦で、他は判別できない。

平瓦は、つぎの3種に分類⁽⁴⁾できる。

平瓦A 斜格子叩き

平瓦B 縄目叩き

平瓦C 無文叩き

13・14は、平瓦Aである。13は、SK 1から出土した。軟質で白黄色を呈する。凸面は幅1.3cmの扁平な斜格子叩きを施し、側面はほぼ垂直に切り取る。凹面は布目を残すが、上から横方向のナデを施す。中央にツメ跡が縦に並ぶ。側面端部に粘土合せ痕が残る。厚さ1.8cm。14は、SB 1の北側柱穴(SP 7)から出土した。これも軟質で白黄色を呈する。凸面は幅2.5cmの斜格子叩きを施す。側面は中央がやや高まり、面取りはない。凹面は布目が全体に残る。高井悌三郎氏の分類する「斜格子目叩き平瓦I」⁽⁵⁾に2点とも相当しよう。

15～22は、平瓦Bである。15は、金鍍金鉸具と同じSP 61から出土した。白黄色を呈する。凸面は、10cm幅に32条の縄目を数え、長さ約6.0cmの叩き痕がみられる。側縁はほぼ垂直に立ち凸凹両面に面取りを施す。凹面は4.0cm幅で桯板痕が残り、布目は整齊である。瓦厚は、狭端部で1.3cmである。16～18は、SK 1から出土した。16は黝黒色を呈し、長石・石英粒を多く含む。凸面は5cm幅に16条の縄目を数える。側縁はほぼ垂直に切っている。凹面はヘラ削り痕が残り、布目は細かい。17は凸面が縄目叩きを施し、凹面には、桯板痕が残る。狭端部は、ほぼ垂直である。18は、凸面が縄目叩き、凹面はヘラ削り。19は、SK 3より出土した。凸面は縄目叩き、凹面に桯板痕が残る。側縁はほぼ垂直で、凹面側に面取りを施す。20は、SK 7より出土した。凸面が縄目叩き、凹面に桯板痕が残る。21は、茶褐色粘質土層より出土した。凸面が右下りの縄目叩き、側縁はほぼ垂直で、凹面に桯板痕が残る。22は、調査地西側の陸上自衛隊伊丹駐屯地構内で表採したものである。凸面は5cm幅に16条の縄目を数え、側縁はほぼ垂直で、凹面に布目痕が残る。15・16・22は、高井氏の「平瓦V」に相当し、他も同様であろう。平瓦Bの厚さは、1.4cm～1.8cmの範囲内におさまっている。

23・24は平瓦Cである。凸面は、いずれも縦にヘラナデを施している。24は、凹面に布目痕と桯板痕がある。瓦厚は、23が1.0cm、24が1.4cmである。

須恵器 (第12図 25～42)

平城宮跡での型式分類⁽⁶⁾に従えば、須恵器には、長頸壺(壺L)、坏A、坏B、坏蓋、台付皿がある。

25は、長頸壺の底部である。肉厚でしっかりした高台を有し、内弯して立ち上がる。内

外面に水挽き痕がある。26も長頸壺の底部である。安定した貼付け高台を有し、内弯して立ち上がる。内外面に水挽き痕がある。いずれもSK 1より出土した。

27～29は坏Bである。27はやや外側へ開く貼付け高台を有し、内弯して立ち上がる。外面は水挽き痕があり、口縁部に1条の沈線を巡らす。見込みにヘラケズリによる調整痕とみられるヘラキズがある。底部には爪跡がはっきり残る指頭圧痕がある。28は貼付け高台を有し、外面に水挽き痕がある。29は外側へ開く貼付け高台を有し、外側へ開きながら立ち上がる。内外面ともに水挽き痕がある。27・28はSK 1から、29はSP50から出土した。

30～38は坏Aで、すべてSK 1から出土した。30は、外側へ斜めに立ち上がる。31は、ややふくらむ底部から屈曲して外側へ開き気味に立ち上がる。32は、平坦な底部から屈曲して斜め上方に立ち上がり、口縁部内面に沈線を巡らす。33は、底部からやや屈曲して外側へ開く口縁部を有する。34は、やや肉厚の底部から内弯気味に立ち上がる。口縁部内面には重ね焼き痕がある。35は、底部から内弯しながら立ち上がる。口縁部内面に1条の沈線を巡らせている。36は、底部から内弯しながら立ち上がる。37は、底部から屈曲して斜め上方に立ち上がる。38は、外反する口縁部である。

39～41は、坏B蓋で、いずれもSK 1より出土した。39は径17.4cm。径1.6cmの宝珠つまみが付くタイプである。40の器高はやや高く、外面および口縁部内面に灰黒色の自然釉がかかる。41は扁平で、おそらく宝珠つまみが付くタイプと思われる。

42は、底部片であり、器形の判別は難しいが、台付皿と考えたい。肉厚の外側へ開く高台をもつ。SK 1より出土した。

土師器 (第13図43～54, 第14図55・56)

土師器には、甕・坏・高坏・鉢・土釜などがある。

43～47は、甕である。43は、SP14から出土した。屈曲して内弯気味に立ち上がる口縁部で、体部外面に左下りのヘラミガキを施す。他の部分はヨコナデ調整である。44の口縁部は大きく外反し、色調は淡橙色で非常にもろい。45の口縁部は屈曲して外反する。46は、垂直に立ち上がる体部上半から屈曲して外反する口縁部で、体部外面は右下りのハケ目を施す。47は、「く」の字状に屈曲して外反する口縁部で端部に面をもつ。体部内外面に横方向のハケ目があり、内面に粘土紐巻き上げ痕が残る。44～47はすべてSK 1より出土した。

48～53は坏で、すべてSK 1から出土した。48は、屈曲して立ち上がる口縁部である。内面に煤が付着しており、部分的にハケ目痕が残る。内面はヨコナデ調整である。49の口縁部はなだらかに外反気味に立ち上がる。50の口縁部は内弯気味に立ち上がり、端部は肥厚する。51は内弯して立ち上がり、口縁部の端部はやや肥厚する。全体にナデがみられる。52は非常に薄い器壁で、やや内弯して立ち上がり、口縁部の端部はやや肥厚する。53は、屈曲して斜め上方に立ち上がり、口縁部の端部は内側へ肥厚する。

54は、SK 1より出土した高杯の脚部である。外面のヘラケズリは9分割して施している。

内面もヘラケズリである。

55は、SK 1 出土の鉢である。内弯する体部からやや屈曲して外反する非常に薄い口縁部である。ナデ調整を内外面に施す。

56は、SP 26 出土の把手付の土釜である。外面に煤が付着し、体部はハケ目が残る。口縁部の端部は面をなす。

磁器 (第14図57・58)

57は、近世のくらわんか茶碗である。内面には灰色がかった緑釉をベースに、染付による斜格子(4条)文などを口縁部に配置する。外面は、口縁部に染付による1条の直線文を施し、体部に2コ以上の水玉文を描く。第二層茶褐色粘土層より出土した。

58は染付碗である。外面は無文の灰がかった緑色を呈し、内面は染付による2条の円弧線を描く。さらに見込みにも文様がある。釉の厚さは内外面とも0.2mmである。SD 1 より出土した。

[註]

1. 山中一郎他『森の宮遺跡 第3・4次発掘調査報告書』難波宮址顕彰会 1978
2. 高井悌三郎他『摂津伊丹廃寺跡』伊丹市教育委員会 1966.3
3. 高井悌三郎前掲書
4. 橋本 久・田辺征夫・五十川伸矢「摂津伊丹廃寺跡 その後の調査」『地域研究いたみ』第14号 伊丹市立博物館 1984
5. 高井悌三郎前掲書
6. 奈良国立文化財研究所『平城宮跡発掘調査報告書』Ⅶ 1976

[参考文献]

岡内三眞・宇野隆夫・五十川伸矢・山口博『丹波周山窯址』
京都大学文学部考古学研究室 1982

V. ま と め

緑ヶ丘遺跡は伊丹廃寺の東に隣接しており、調査に先立って伊丹廃寺に関連する遺構・遺物の検出が予想された。さらに、全容の不明確な緑ヶ丘群集墳への手掛かりも期待された。今回の調査では、こうした予想通りの遺構・遺物を検出し、縄文人のあしあとの一端も確認できた。以下に成果を概略し、まとめとしたい。

調査地点が伊丹段丘上の微高地に相当したのか、遺構・遺物包含層は、地表下10～20cmの浅いところで検出され、後世の削平がかなりの範囲に及んでいると推定された。にもかかわらず、顕著な遺構・遺物を確認できたことは幸いであった。

検出した遺構としては、2棟の掘立柱建物跡(SB 1・SB 2)、多数のピットや土壇、それに北北東から南南西方向に並行する6本の浅い溝状遺構がある。

SB 1は直径30cm前後の円形の柱穴をもつ2間×3間の建物跡で、南北方向に桁行をもつ。東西の梁行は3.6mで2間分の間隔があるが、棟持柱に当たる柱穴がない。そのため、建物跡の中央南で検出した柱穴が、これに伴うものか否かは不明である。南北端の棟持柱の柱穴が浅く、既に削平されたとも考えられるが、今のところSB 1の構造は棟持柱を持たない簡単な構造物と考えておきたい。

SB 2は東西の柱通り中央の柱穴が棟持柱の柱穴と考えられ、南北に桁行をもつ一辺が約8mの正方形の建物跡である。柱穴は50cm前後の方形にまとめられている。この建物跡の東南隅2間四方が特別に区画された場所であったらしく、この部分の柱間隔は一の間隔で並んである。建物の構造としては、特別に区画された場所には床が張ってあったと想定でき、建物の $\frac{3}{4}$ が土間、 $\frac{1}{4}$ が納戸で構成されていたと考えられる。また、この建物跡の東北隅に直径約2mの土壇SK 1がある。この土壇の出土遺物は碗・皿などの生活用具で占められ、この建物に付属した施設ではないかと考えられる(1)。

ところで、この2棟の建物跡は、SB 1の南東隅の柱穴とSB 2の北西隅の柱穴が共有する位置にあり、接続した建物のように思われるが、柱穴の形状の違いや建物の主軸がわずかに異なることから同時に存在した建物とは考えられない。しかし、出土遺物は2棟の建物とも伊丹廃寺と同時期の遺物にもなっており、相前後して建てられたものであろう。

さらに、これらの建物跡の周囲から検出した多数のピットについては、SX 1を除いて組み合わせになるものはないが、その多くはSB 1・2と同時期のものである。

上記の遺構より新しいものとしては、ほぼ南北方向に並行する6本の溝状遺構(SD 1～5・7)がある。この溝状遺構は、土層の関係から先述の建物跡などが廃絶したのちに穿たれたもので、同一方向へ流れる規則性から耕作関係のものと思われる。

次に主な遺物について見てみよう。主な遺物としては、縄文時代の石鏃(中期～後期)

・刃器・加工痕のあるチャート片、古墳時代後期の須恵器、奈良時代の瓦・土師質土器・須恵器・金鍍金鉸具を検出した。縄文時代の遺物は、Ⅱで記したように伊丹段丘上の数ヵ所で検出されており、段丘上に縄文遺跡が広く分布していることを推定させるものである。

また、小片ではあるが古墳時代後期の須恵器が出土したことにより、緑ヶ丘群集墳との関連が想定され、付近に古墳および集落の存在が考えられる。

奈良時代の遺物では、金鍍金鉸具が特筆に値する。この鉸具は、SB 2の北端から北へ2.5 m離れたピットSP 61から伊丹廃寺のと同じ瓦とともに出土した。外枠が小さく、小片であるため銚帯の鉸具であるか否かは断定できない。もし銚帯の鉸具であるとすれば、養老衣服令の規定から推定して、五位以上の官人の所持品であった可能性がある。大宝令で賜冠は停止され、かわって銚帯が官位識別の具の一つとして用いられるようになった。現在、銚帯を出土した古墳・遺跡は全国で90ヵ所を越えているが、五位以上が許された金銀装の銚帯は数例しかない⁽²⁾。しかし、奈良時代の金鍍金銚帯としては初めての出土例である。金銅製および金鍍金、銀鍍金の青銅製のものが、五位以上を示す金銀装であるかについては疑問視するむきもあり⁽³⁾、大阪府伽山遺跡で純銀製の銚帯が発掘されたことにより、鍍金したものは五位以上の装具ではないとする説⁽⁴⁾もある。

ところで、今回発掘した鉸具は銚帯のものとしては一般的に小さすぎ、銚帯のものではないとする意見もあり、その取り扱いについては今後の課題である⁽⁵⁾。

最後に、この遺跡の性格について述べてみたい。この遺跡の建物跡などの遺構は伊丹廃寺と同時期のものであり、特に伊丹廃寺に使用されたのと同じ瓦が少なからず出土しているのが特徴である。先述したようにこの2棟の建物跡は、その構造から瓦を葺いた建造物とは考えられない。とすれば、伊丹廃寺と同時期に目と鼻の先に存在した緑ヶ丘遺跡とは、伊丹廃寺とどのような関係にあったのだろうか。

数年前、兵庫県多可郡の多可廃寺から銅鐘の鑄造遺構が発掘された⁽⁶⁾ことは記憶に新しい。このような寺院建立に伴う工房跡の検出例は増えつつある。しかし、伊丹廃寺関係の発掘調査は現在まで35次を数えるにもかかわらず、再建時の瓦窯跡の発掘例を除けば、創建時にかかわる工房跡などの関連遺構は検出されていない。おそらく、近辺に工房跡や作業場跡などがあったと考えられながら、周辺部の発掘調査が思うに任せなかったためであろう。

ここで、緑ヶ丘遺跡と伊丹廃寺との関係を要約してみると、緑ヶ丘遺跡は①伊丹廃寺のすぐ東側に隣接し、②伊丹廃寺と同時期の遺跡であり、③伊丹廃寺の瓦と同じ瓦が多数出土し、④貴人の所持品と思われる金鍍金の鉸具が出土している、ことがあげられる。以上の内容に鑑みて、緑ヶ丘遺跡は伊丹廃寺に深く関わった遺跡とみて誤り無からう。しかしながら、それらの遺構は伊丹廃寺に直接関連する確たる徴証がなく、遺跡の性格を論ずるにはまだまだ検討の余地があろうが、大胆な考察が許されるならば、次の二通りのことが

考えられる。一つはSB 1・2の建物跡は、伊丹廃寺の建立に関わった豪族の居館に属する建物と考えられ、二つには伊丹廃寺造営にともなって設営された工房・作業場にかかわる建物に想定できる。

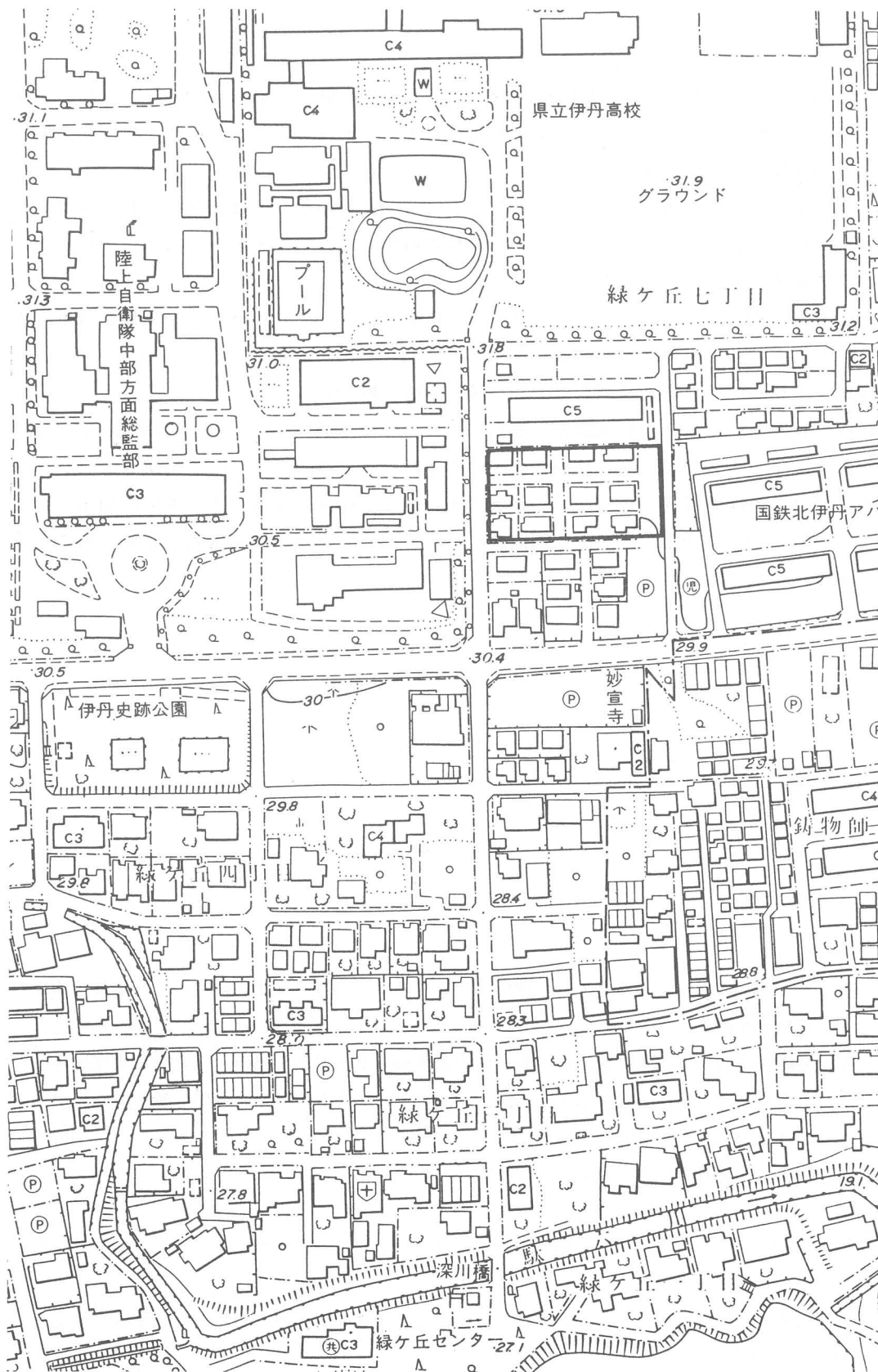
このように緑ヶ丘遺跡を性格づけるならば、SP 61で検出した金鍍金の鉸具は鍔帯か否かは別にして、伊丹廃寺に深く関わった人物の所持品であったと考えられる。それが何故ここで紛失され、埋没したのかは分からないが……。

これとは別に、この鉸具については、伊丹廃寺造営にさいして必要な金属類を再生産するために、ほかより将来させられた集積品ではないかとする考えもある。今、このことを検討する材料を持ち合わせておらず、今後の調査に期待せざるをえない。

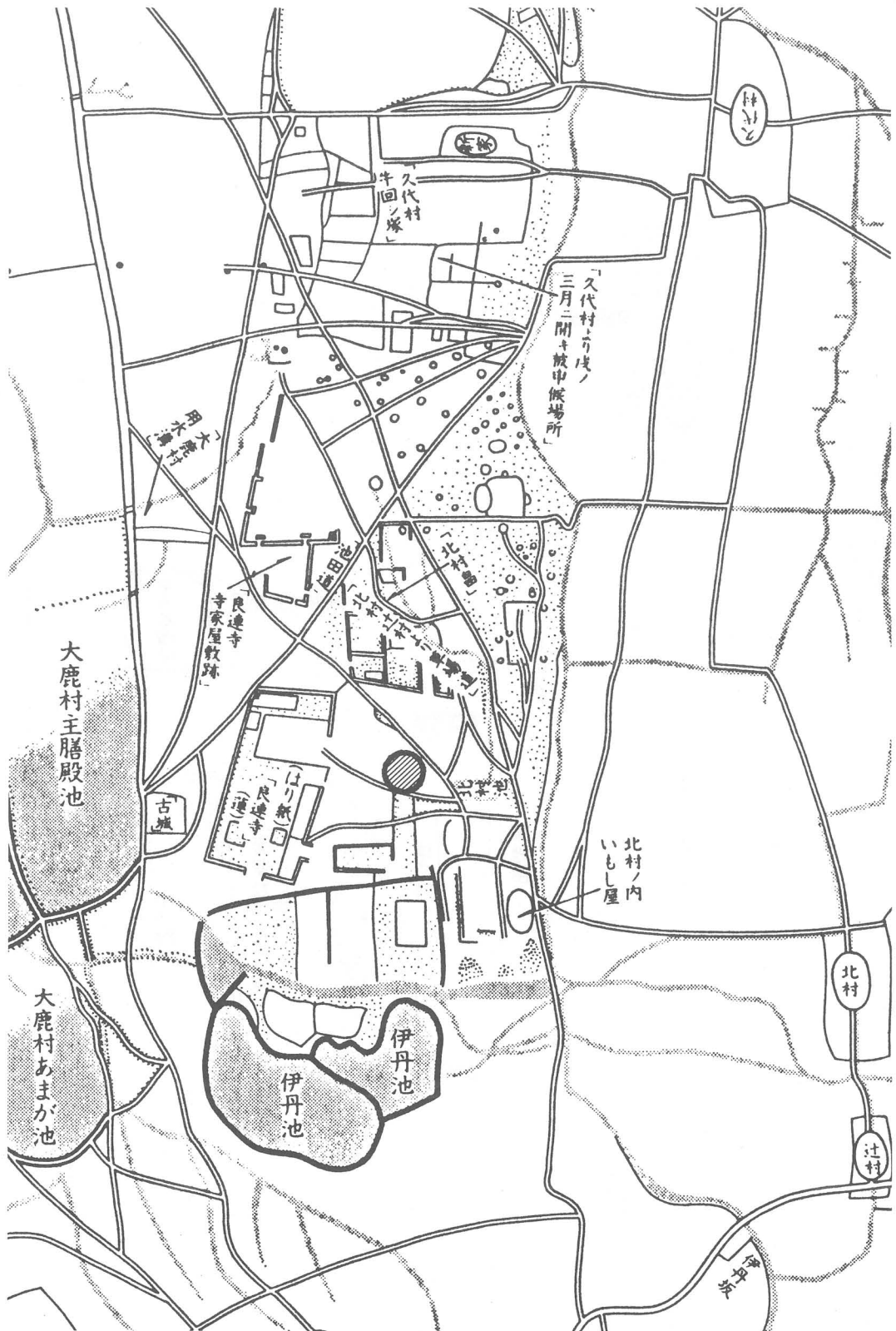
緑ヶ丘遺跡の重要性は発掘調査が進行するなかで明らかになっていき、調査終了時点で防衛庁、県・市教育委員会、発掘調査団とが遺跡の取り扱いについての協議を行なった。その結果、遺跡の保存はむづかしく破壊も止む無しの結論になったが、周辺の開発、なかんずくこの南側に予定される第3期宿舍改築工事には十分な準備と調査が必要であることが確認されたことをここに付け加えておく。

[註]

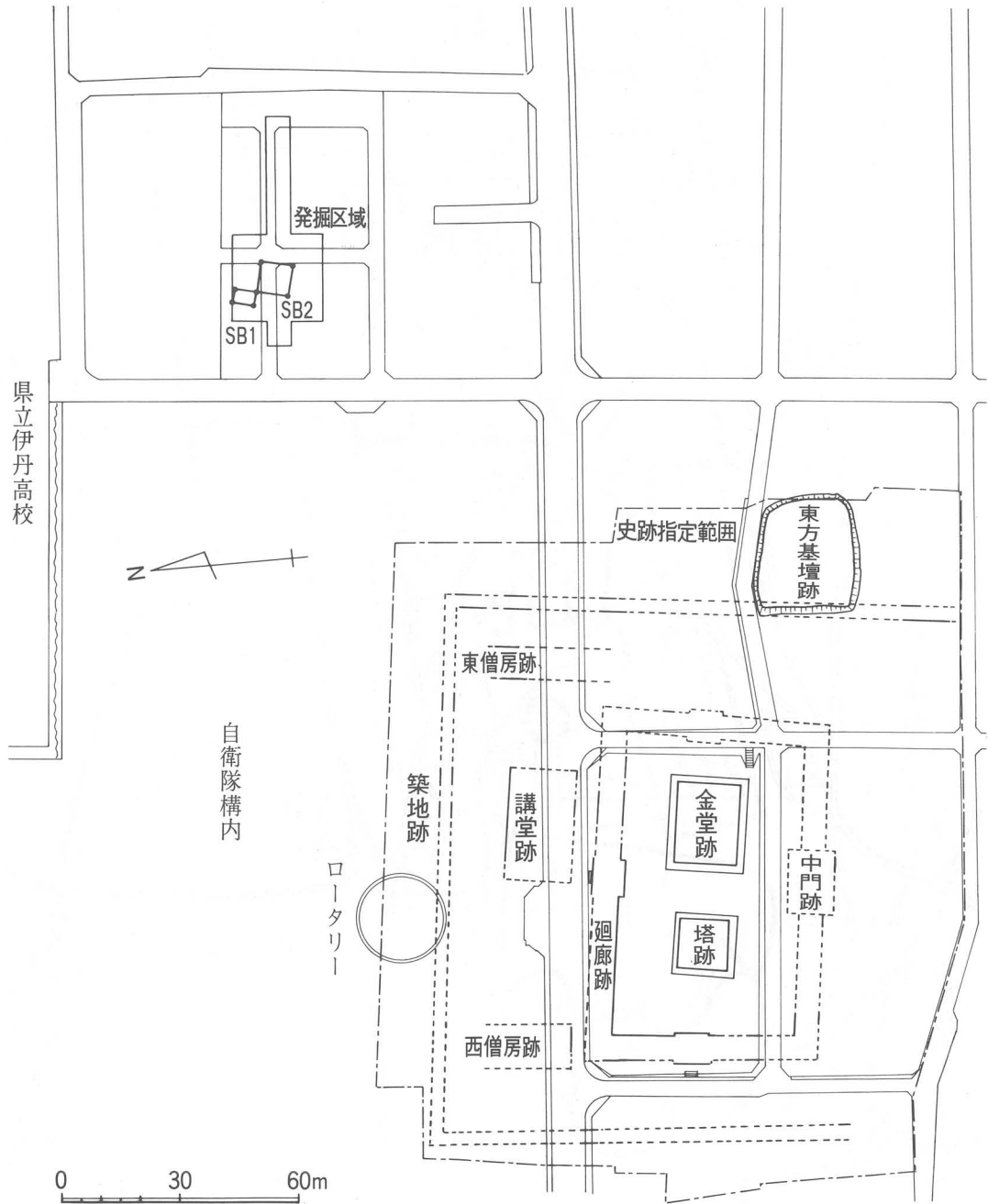
1. SB 2の構造およびSK 1との関係については、奈良国立文化財研究所 宮本長二郎氏の御教示を得た。
2. 金銅製の鉸具は三重県鬘遺跡・石川県寺家遺跡・群馬県陣馬遺跡・同県芳賀東団地遺跡・埼玉県若葉台遺跡・岐阜県美濃国分寺から出土。金鍍金鉸具は宮城県矢崎古墳から出土。銀鍍金鉸具は京都府長岡京跡から出土。
3. 亀田博「装身具にみる身分制度」『季刊考古学』第5号 1983
4. 佐藤興治「律令制の時代」『季刊考古学』第5号 1983
5. 奈良国立文化財研究所 町田章氏から鉸具について多大な御教示ならびに問題点の指摘を受けた。
6. 神崎勝「天田遺跡（梵鐘鑄造遺構）」『兵庫県埋蔵文化財調査年報』昭和56年度 1984.3



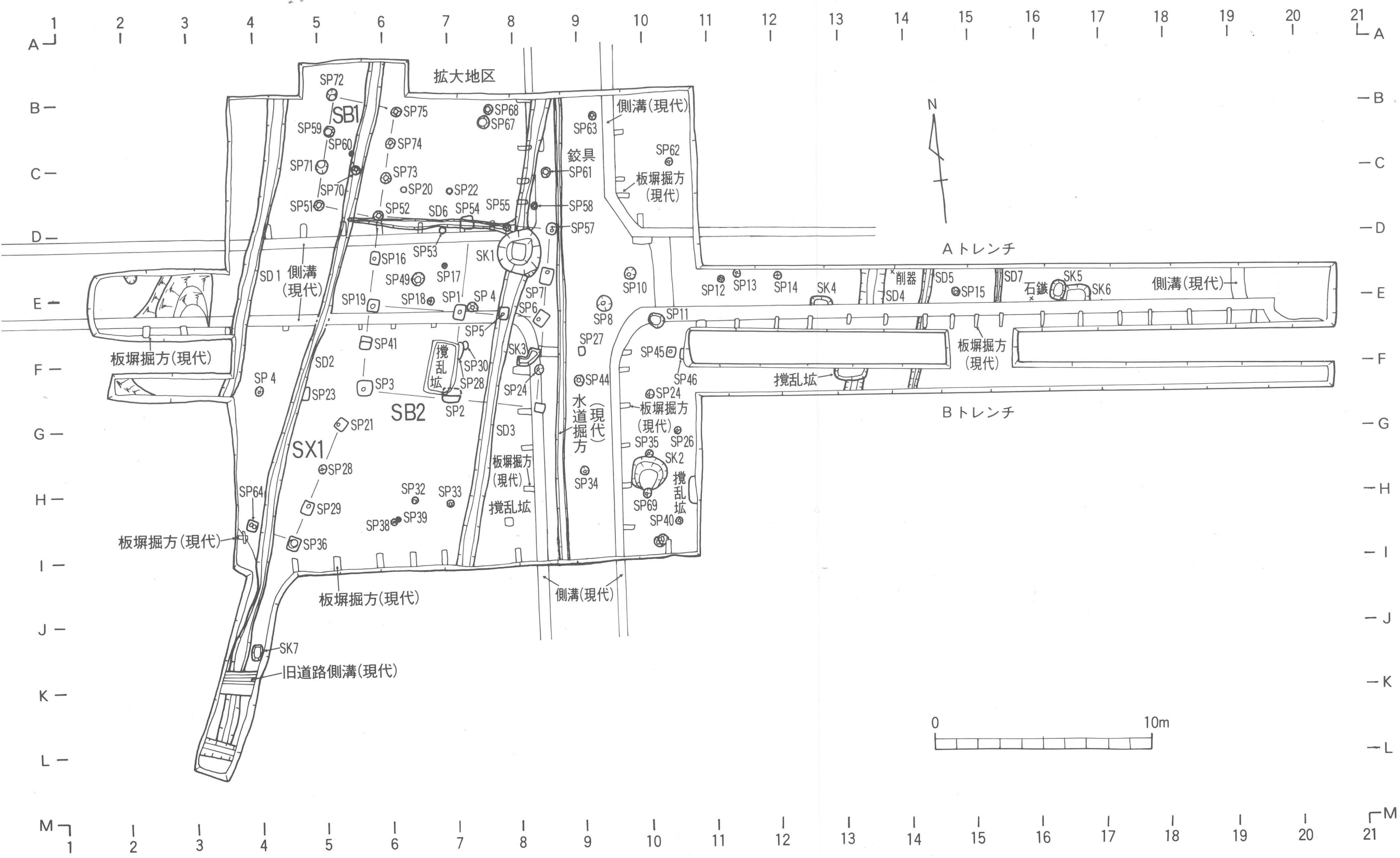
第4図 遺跡の現況 (1/2,500) 1980年



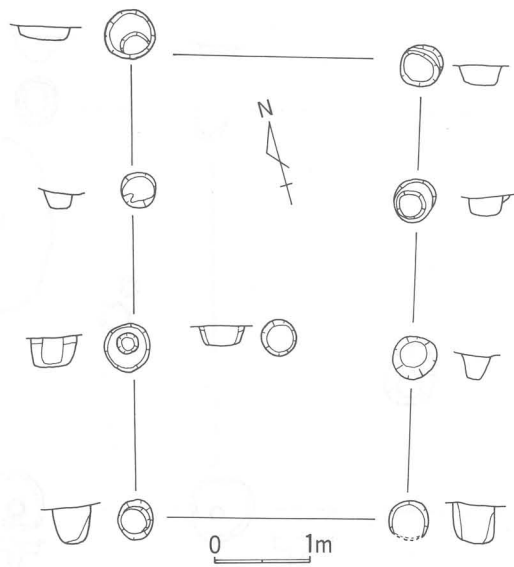
第5図 寛文年間北村絵図(伊丹資料叢書6『伊丹古絵図集成』伊丹市立博物館所収)
 [●が遺跡の位置]



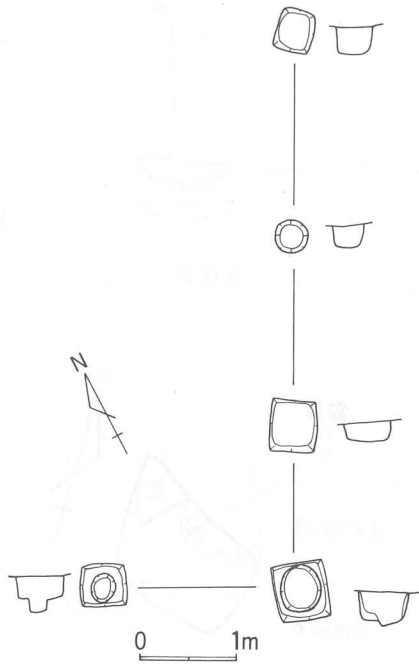
第6図 緑ヶ丘遺跡と伊丹廃寺



第7図 調査地区実測図

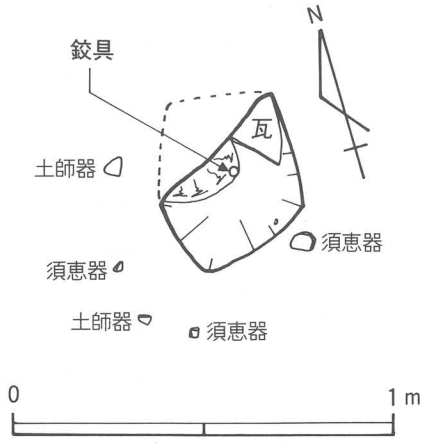
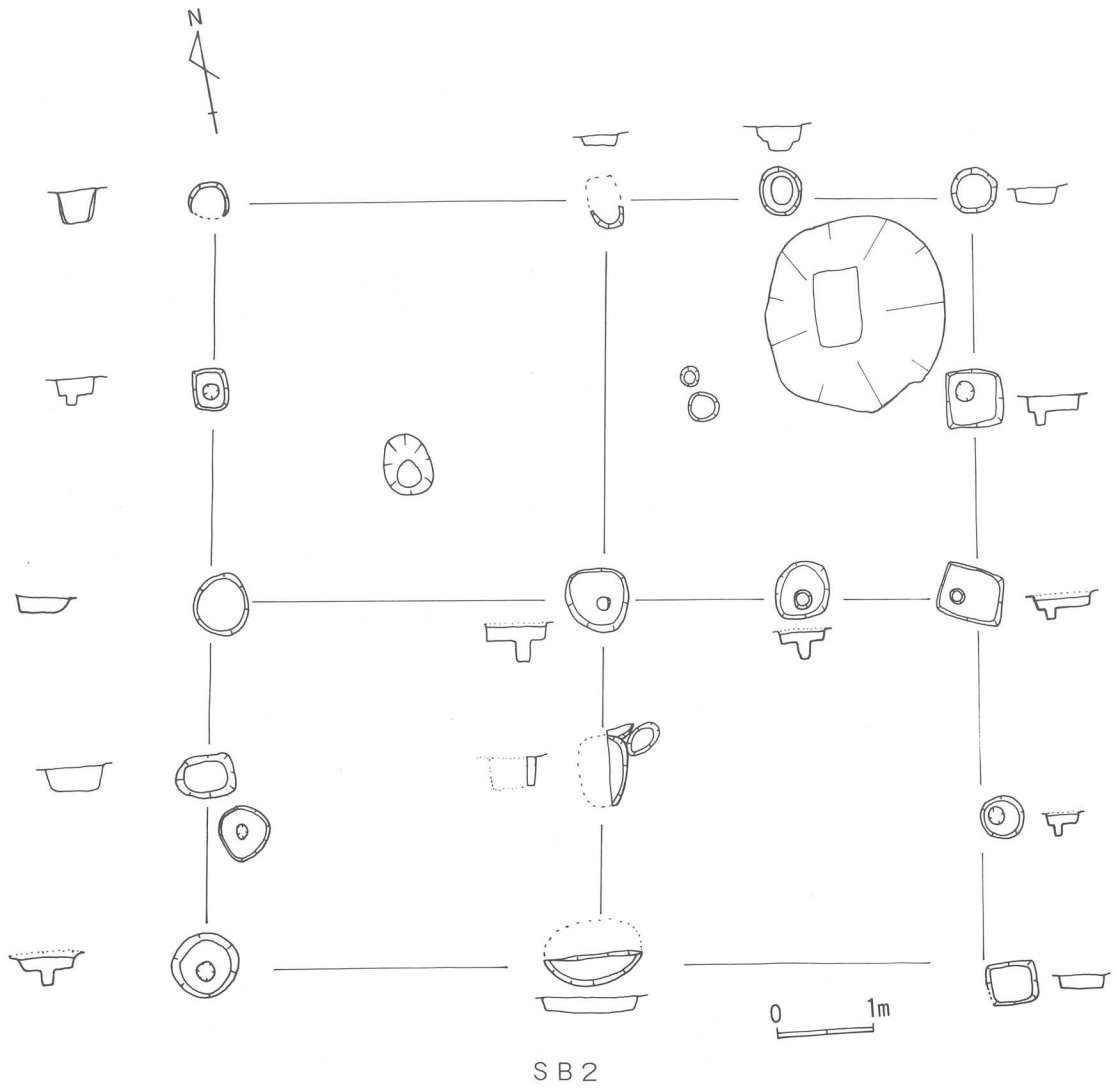


S B 1



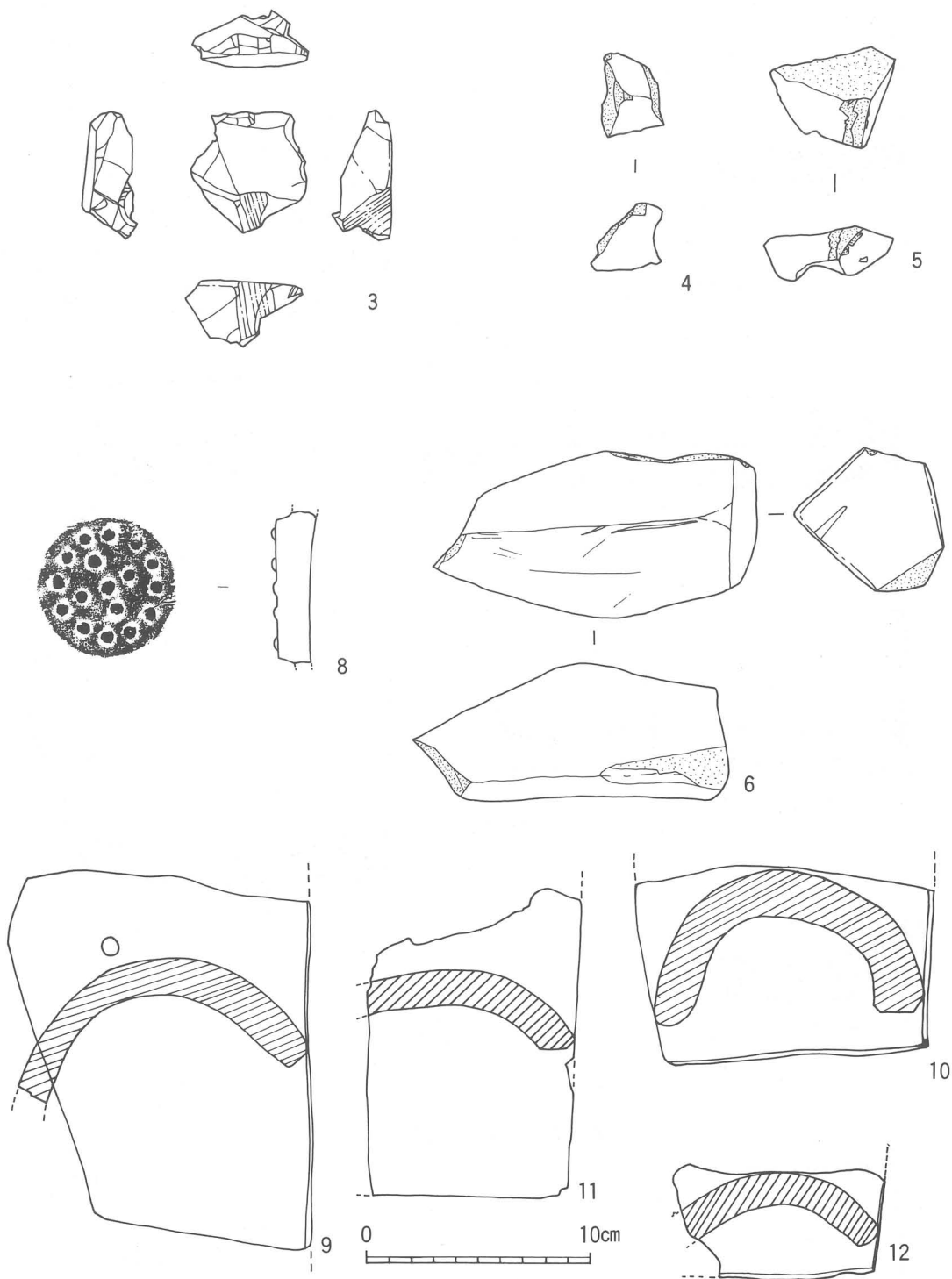
S X 1

第8図 掘立柱建物跡S B 1・S X 1実測図

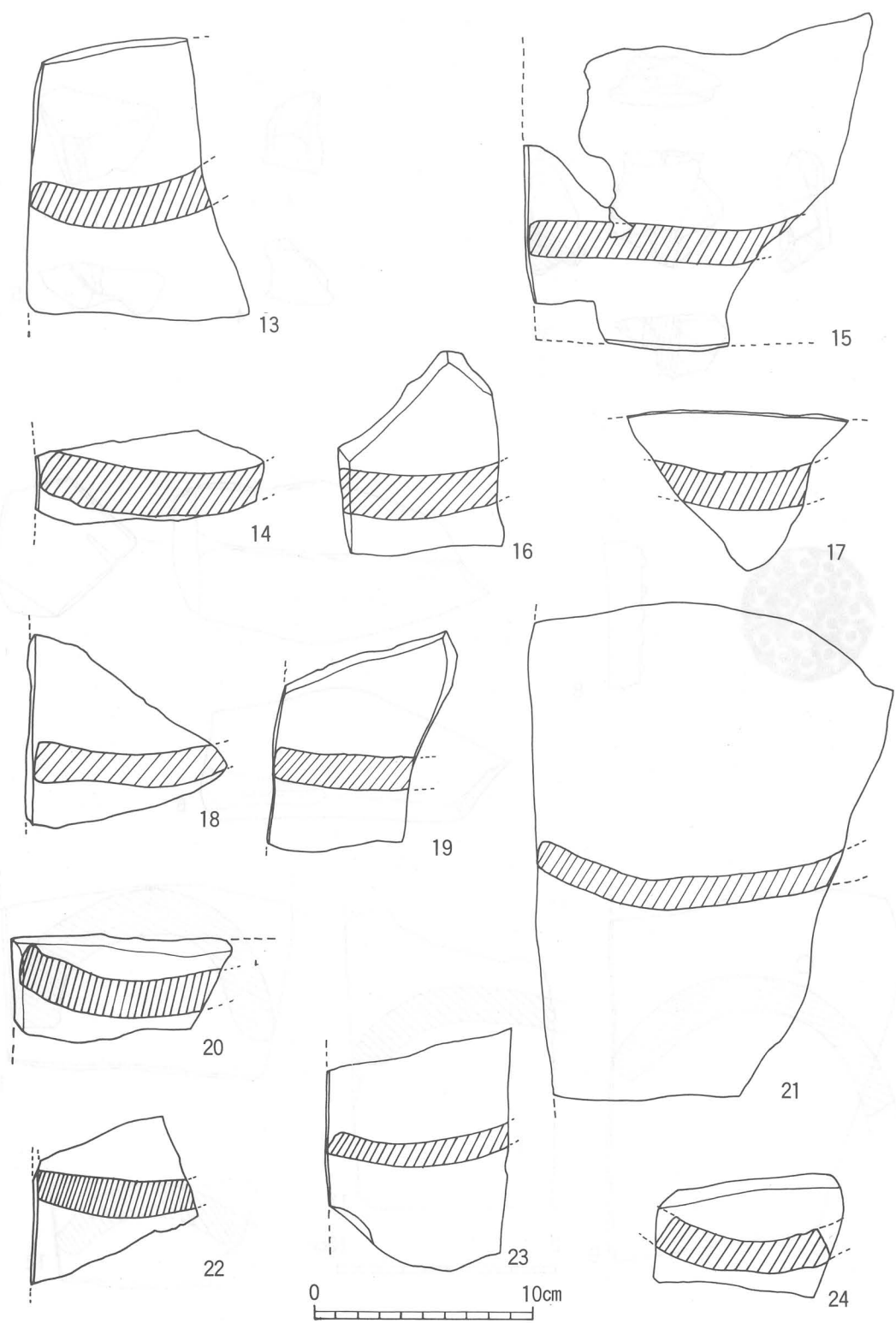


鉸具出土状況

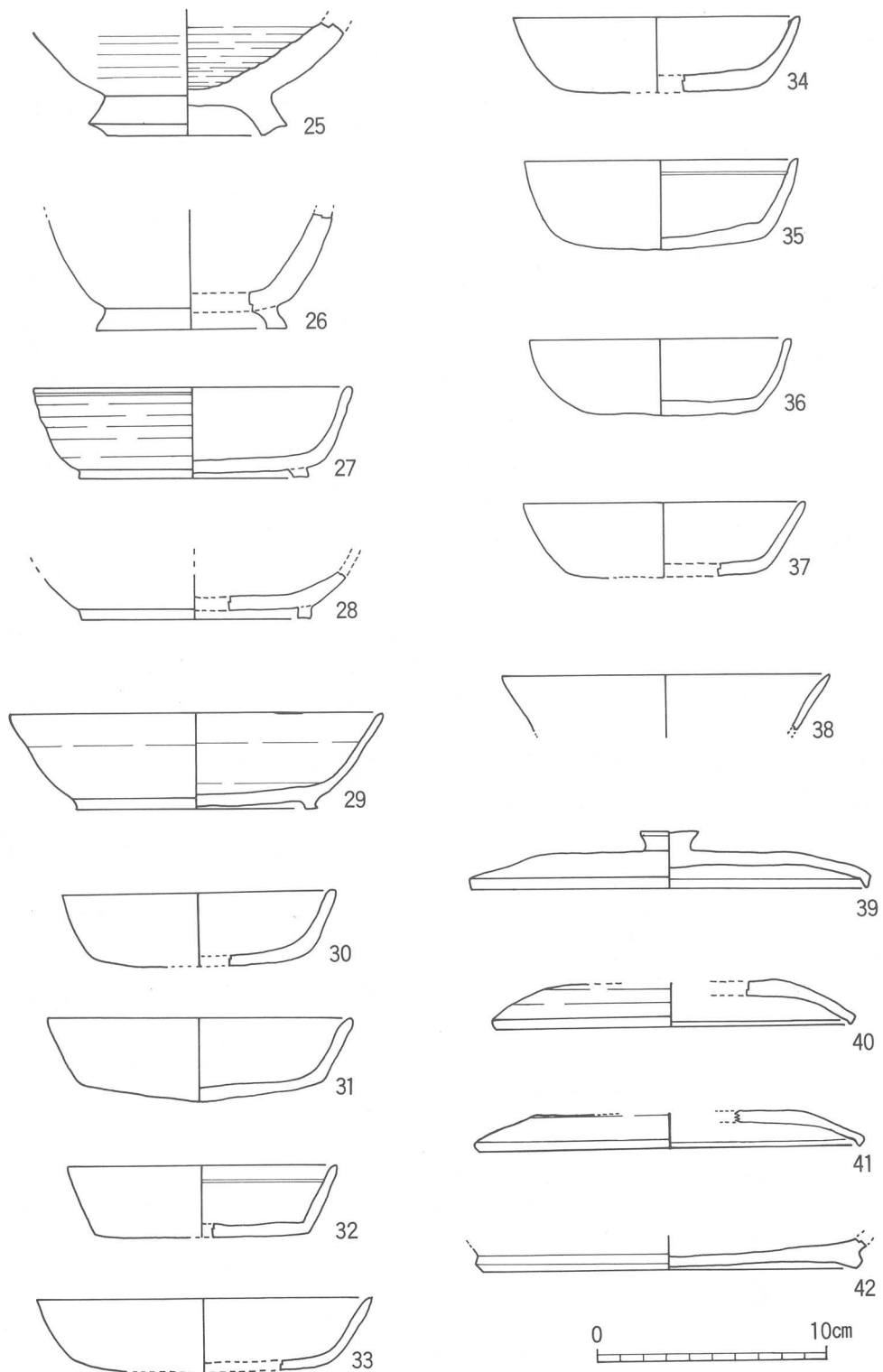
第9図 掘立柱建物跡SB 2、鉸具出土状況実測図



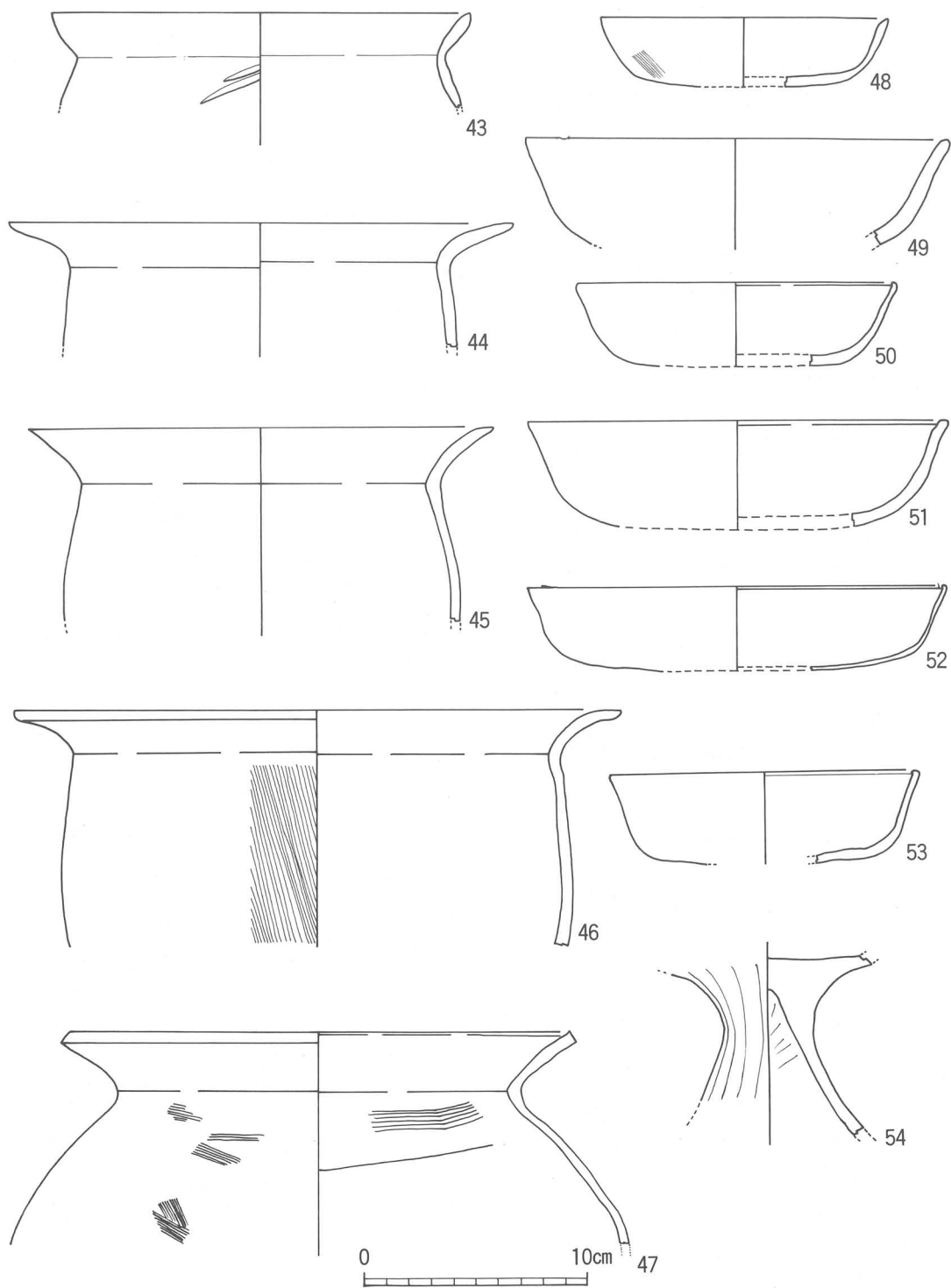
第10图 石器·瓦实测图



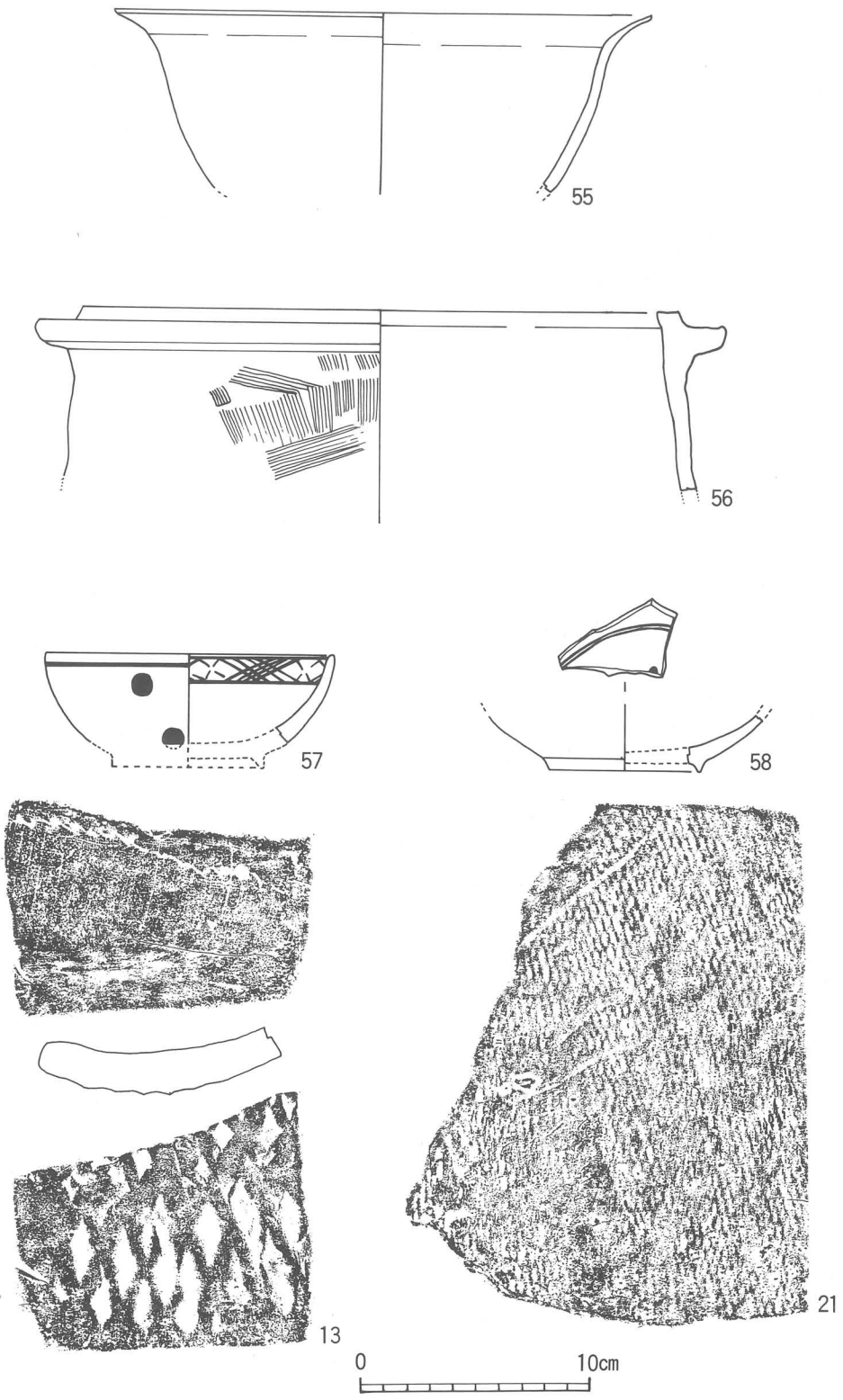
第11图 瓦实测图



第12図 須恵器実測図



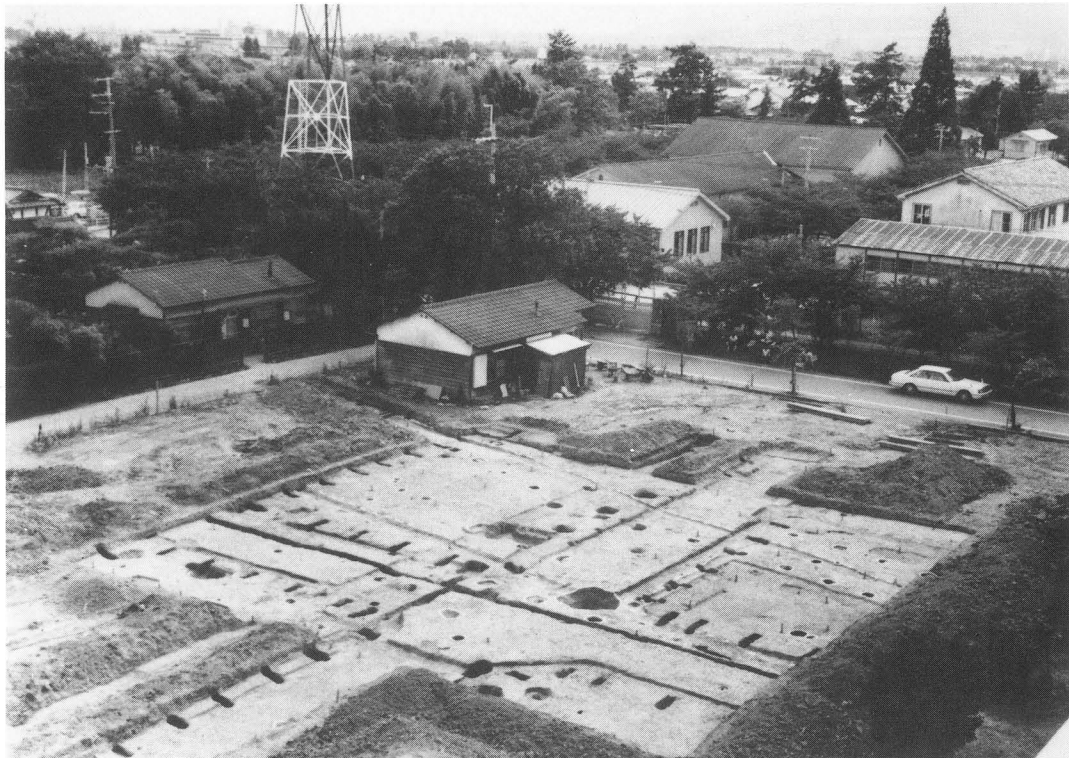
第13図 土師器実測図



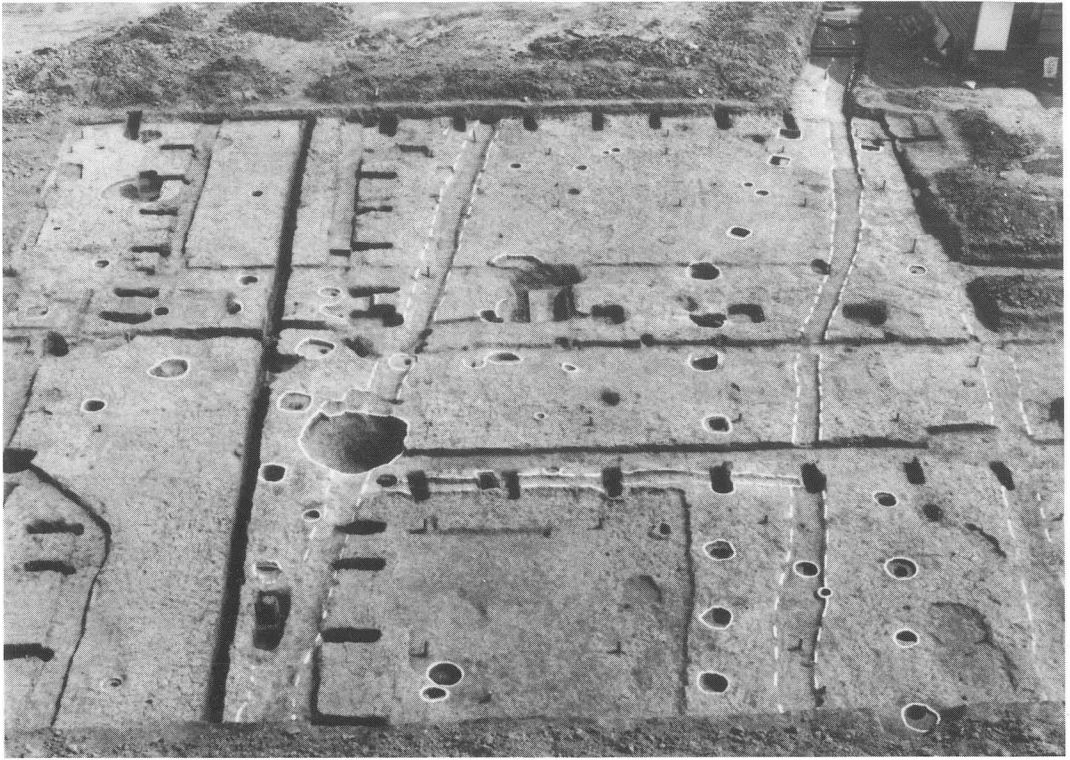
第14図 土師器・磁器・瓦実測図



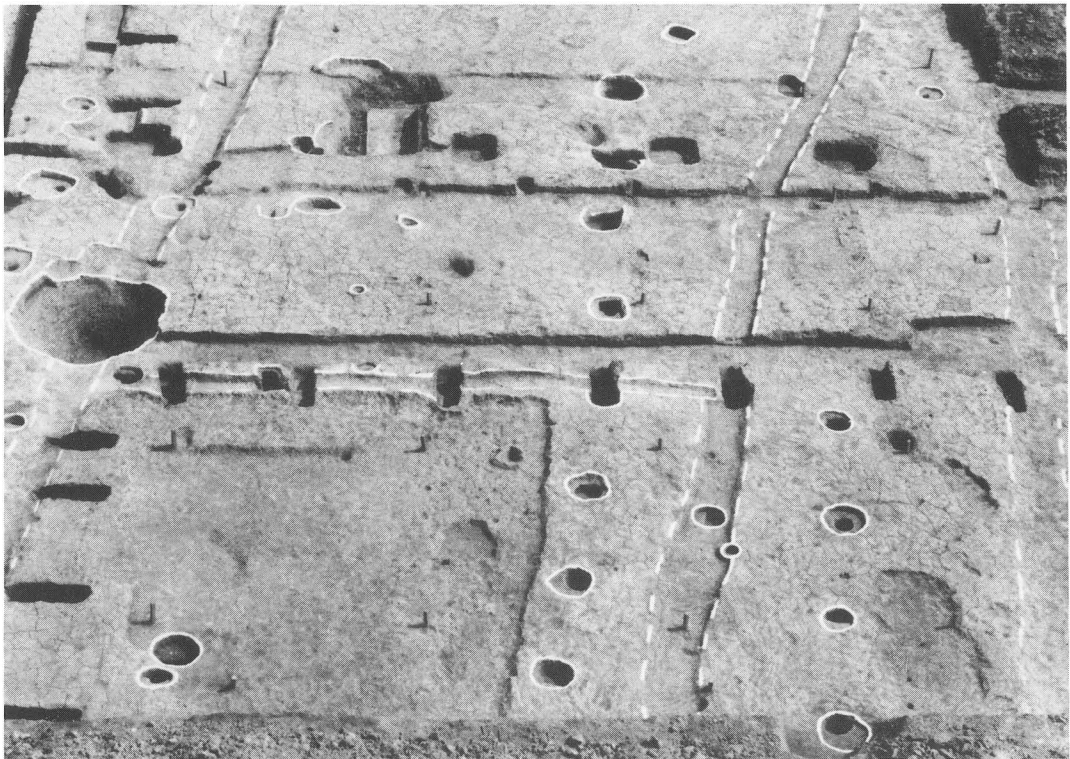
発掘前の現況（西北より）



緑ヶ丘遺跡と伊丹廃寺



主要遺構全景（北から）



SB1・SB2全景（北から）



調査地東部発掘状況 (SD6・SD7)(北から)



鉸具出土状況 (中央上が鉸具、下が縄目叩き瓦)



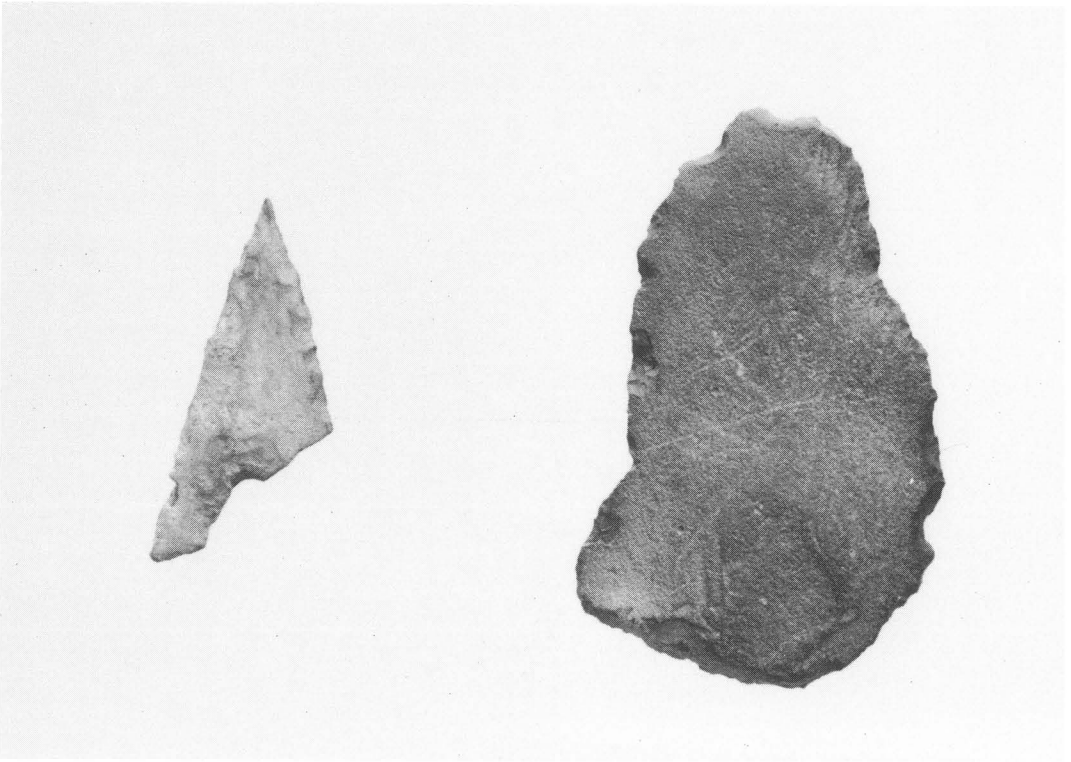
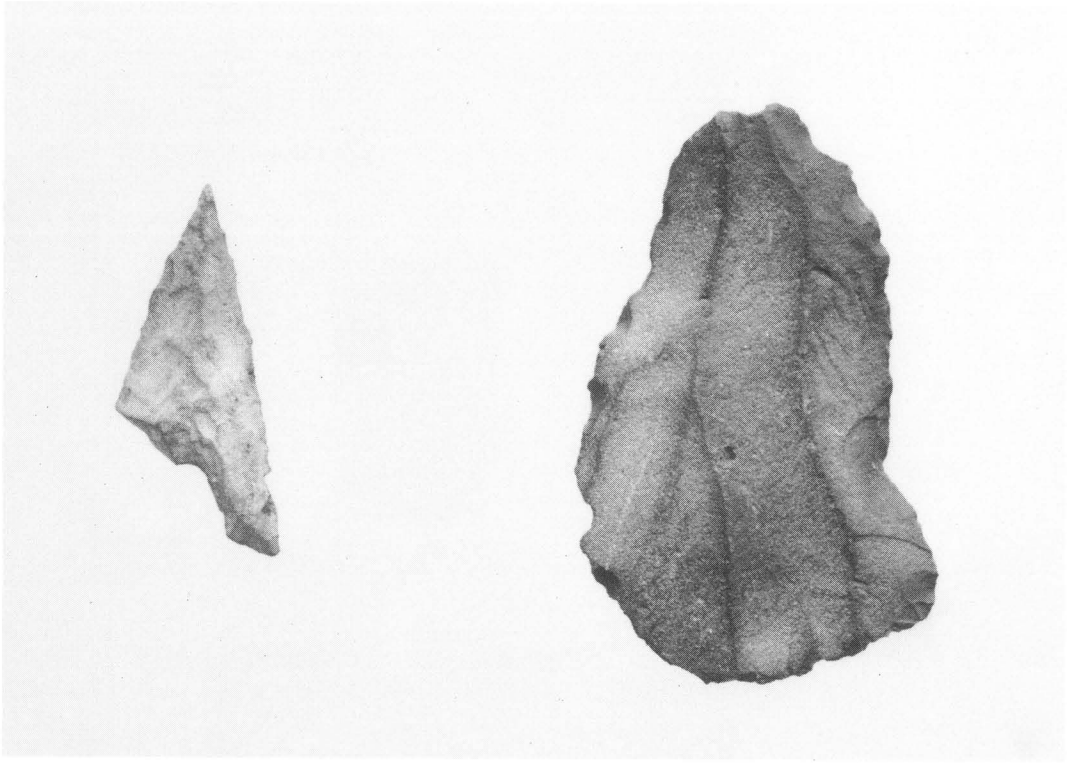
S K 1 遺物出土状況



S K 1 発掘状況



鉸具 (表・裏)



石鏃・削器（表・裏）

伊丹市緑ヶ丘遺跡

1986年3月31日発行

編著 伊丹市緑ヶ丘地区埋蔵文化財調査団

発行 伊丹市教育委員会

印刷 アイシー印刷(株)

